

# いしづち

2015.1

No.102

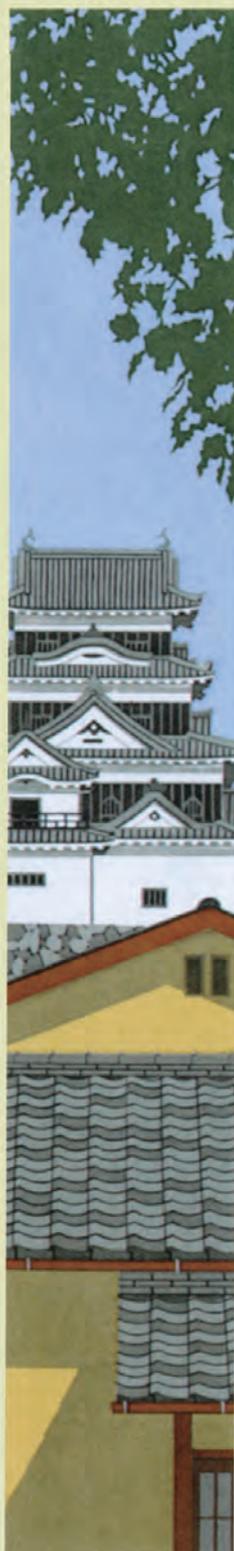


公益社団法人 愛媛県建築士会

<http://www.ehime-shikai.com>



幟(式)



大洲城(壱)

松村正恒語録

「竹のはなし」 山田竹材 (その一)

間 施主と設計者との「間」

1	新年にあたって	会 長	寺尾 保仁 ……①
2	松村正恒語録		……②
3	竹のはなし	山田竹材 (その一)	山 田 竹 材 山田 清昭 ……③
4	光のはなし	光の質	宮地電機株式会社 田部 泉 ……④
5	しつらひ	『いろ』いろいろ (1)	松 山 支 部 東 優 ……⑤
6	夢・現	明かりのこと	松 山 支 部 玉乃井公和 ……⑥
7	間	施主と設計者との“間”	……⑦
8	年男・年女	新 居 浜 支 部 西 条 支 部 周 桑 支 部 今 治 支 部 松 山 支 部 伊 予 支 部 大 洲 支 部 八 幡 支 部 西 予 支 部 宇 和 島 支 部	藤 司 ……⑧ 縄 信二 ……⑩ 藤 章太郎 ……⑩ 汲 俊秀 ……⑩ 田 光俊 ……⑩ 黒 佳代 ……⑩ 近 藤山敬晃 ……⑩ 山 根良忠 ……⑩ 赤 原昌彦 ……⑩ 相 利 ……⑩ 原 田英久 ……⑩ 隅 大記 ……⑩ 田 昌弘 ……⑩ 渡 山昌也 ……⑩ 辺 本直 ……⑩ 山 家直 ……⑩ 徳 冨 ……⑩ 本 直 ……⑩ 藤 晃 ……⑩ 清 哲 ……⑩ 大 塚 ……⑩ 二 宮 ……⑩ 宮 哲也 ……⑩ 塚 定幸 ……⑩ 兵 頭 ……⑩
9	全国 (ふくしま) 大会報告	第52回建築士会連合全国大会「ふくしま大会」に参加して 一言感想	宇 和 島 支 部 酒井 純孝 ……⑳ 新 居 浜 支 部 越智 省二 ……㉑ 白 石 公成 ……㉑ 山 田 順 ……㉑ 石 丸 真智子 ……㉑ 大 上 惠子 ……㉑ 小 泉 貴央 ……㉑ 武 内 邦彦 ……㉑ 二 宮 廣史 ……㉑ 宮 初子 ……㉑ 田 中 羊子 ……㉑ 神 田 孝一 ……㉑ 水 野 日出夫 ……㉑ 豊 田 康夫 ……㉑ 與 那 原 浩 ……㉑
10	支部報告	第6回いまばりのまちをつくろう絵画コンクール 「今治にこんな学校があったらいいな！」開催報告 今治支部地域実践活動委員会委員長	曾我部 準 ……㉒
11	委員会報告	ソフトバレーボール大会報告 (優勝チーム) ソフトバレーボール大会報告 (ブービーチーム)	四 国 中 央 支 部 石村 卓也 ……㉓ 宇 和 島 支 部 亀岡 泰治 ……㉓
12	けんちくの輪	建築士会の活動を振り返って 私の休日	松 山 支 部 和田 崇 ……㉔ 西 予 支 部 村上征士郎 ……㉔
13	お知らせ	第5回理事会報告 (概要報告) 専攻建築士 (新規・更新) 登録のお知らせ 平成26年秋の黄綬褒章に本田壽さん受賞 他 「人・建築家・松村正恒を見て来た人」と題して受けたインタビューについて。 編集後記	事務局 ……㉕ 事務局 ……㉕ 事務局 ……㉕ 松 山 支 部 二宮 初子 ……㉕ 情報広報委員 ……㉕

# 新年にあたって

明けましておめでとうございます。

日頃は士会活動に参加 ご協力を頂きましてありがとうございます。会長を拝命して早半年になります。引継事項の継承、単位士会 ブロック 連合会の様々な会に通り出席して やっと次に向けて行動に出られるなといった感じです。公益法人移行から2年目 今年は来期からの事業に向けて幾つかの新しい取り組みを行いたいと思います。

## ○ 大工向けの講習会の実施

昨年から計画している、大工さん木造建築を行う者にとって 基礎的知識を学んでもらう 講習の実施を行います。今新しい教科書を作成しております。実験映像等を使い、より実務的に学んで頂けるよう考えております。知っていると思っけていても 是非皆さんもう一度再確認する意味においても受講を検討してみてください。

## ○ ヘリテージマネージャー育成講習会の実施

“ヘリテージマネージャー” 聞きなれない言葉ですが 歴史的建造物の保全・活用に関する専門家の事で、その育成講座、資格認定・登録を建築士会を中心に行うということです。伝統的工法により築造された歴史ある建築物（古民家・蔵）、歴史的価値ある建築物・工作物（指定文化財・登録文化財等）を保全 活用し建築文化の向上 美しい景観形成を担う人材の育成を行いたいと思います。建築文化の伝承に関する事業は これからにおいての建築を担う若い人達の為にも今やっておかなければならないことと思います。また災害の際にも文化財が失われないように正しく補修 保全を行う技術の研鑽の必要を思います。各県でももうすでに育成講習が行われて



会長 寺尾 保仁

います。愛媛においても準備段階ですけど、講習会に向けて今色々検討をしております。

## ○ 行政への協力

公益法人に移行して2年目になります。公益法人だから行政協力という訳じゃありませんが、先日県にお伺いした時に震災前にやっておかなければいけない事がいろいろあって大変だとお話をお聞きいたしました。そこで我々としても急を要する防災上の事なので、何か会としても協力できる事があればと 申し上げたところ、震災時の緊急避難道路の選定の手伝いができないかとの事になりました。連合会でも各単位士会の行政協力を推進している事でもあり 本会理事会の承認も得て 協力をする事になりました。できれば今年度中に 第一段を行い 来年度も、引き続き協力をしていきたいと思っております。

以上が年頭にあたり今年・今年度の目標とするところでありです。今年度は 建築士として従来は設計業務に対してどちらかと言えば重きを置いておりましたが、施工 監理業務においても力を入れて研修 研鑽に努めたいと思っております。

毎年のことではありますが、いかなる事も去年よりもよくなればと 思いながら一年が過ぎてしまい 反省すること頻りでありです。今年は それぞれの活動を大切に より士会活動が活発になるようにと思っておりますので より一層のご協力とご支持をお願いいたします。

# 建築家と呼ばれたいなら…

技術を磨く、それは技術をマスターした人の言うこと。

先ず技術、その中には計画言語、歴史、材料学、建築経営学まで含む。

これを忘れるな。

単なる技術屋ではいけない。建築家と呼ばれたいなら人格を磨け。

- フランク ロイド ライトの偉さが分かるか。

宮脇先生、黒川紀章先生に感心ばかりしては、駄目なのだ。

技術を磨く、それは技術をマスターした人の言うこと。  
 先ず技術、その中には計画言語、歴史、材料学、建築経営学まで含む。  
 これを忘れるな。  
 単なる技術屋ではいけない。建築家と呼ばれたいなら人格を磨け。

● フランク ロイド ライトの偉さが分かるか。

宮脇先生、黒川紀章先生に感心ばかりしては、駄目なのだ。

技術を磨く、それは技術をマスターした人の言うこと。  
 先ず技術、その中には計画言語、歴史、材料学、建築経営学まで含む。  
 これを忘れるな。  
 単なる技術屋ではいけない。建築家と呼ばれたいなら人格を磨け。

● フランク ロイド ライトの偉さが分かるか。

宮脇先生、黒川紀章先生に感心ばかりしては、駄目なのだ。

# 「竹のはなし」 山田竹材 (その一)

山田竹材 山田 清昭

小竹の産地は伊予、大竹の産地は京都と言われていたように、大洲喜多郡は昔から良質の竹が育つ地域で、それに伴い竹は地域の資源として活用され、竹を使った産業が生まれました。

竹は強靱で耐水性があり、しかもしなやかで細工しやすいという特性を持っており、籠・熊手・竹箒・すだれなど、さまざまな日用品の材料となった。

私の父は、戦時中町内にあった竹材店に従事し、竹細工職人として努力を重ね、20代半ばの昭和30年に「山田竹材」として独立をした。

(なぜ後ろに店を付けて、山田竹材店にしなかったのかというと、「店」がない方が大きな存在感がある、という理由からだった)

当時は物資不足もあり、竹や木製品の需要供給が著しく、生産が追い付かないほど多忙を極めたという。

多い時には10数人の従業員を雇用し、夏柑用の籠製造を主力としていたが、ダンボール箱の普及により、それを諦めて素早く作業用手箕に主力を切り替えた。一ヶ月に一万個近くの製造(もちろん全て手作業)が見られ、納屋や牛小屋を改造した作業場から、新しく二階建ての作業場を建てた。

写真は、まだそれ以前の原竹置場でのもので、昭和40年5月5日の五十崎大風合戦で、山田竹材チーム初参戦10位入賞の記念撮影である。中央賞状を持っているのが父で、五十崎風特有の風文字が苦手だったので、ヘタな筆文字で山田竹材と書き逃えた合戦風だったが、竹細工職人だけあって風作りはうまかった。(三人とも既に他界) もう一枚は同41年10月、同じく原竹置場で姉と。

家の周りには、常に束にされた竹が積み上げられていて、私達は遊び場にしていた。

この年の運動会、紅白玉入れ競技の竹カゴが破れていたため、急遽父に学校から注文が入り、出来上がったカゴを姉と一個ずつ手に提げて集団登校したのを、今でも覚えている。

気前のいい父だったので、当然その玉入れのカゴは、山田竹材寄贈となった。

(現在使用されている母校の玉入れのカゴは、化学製品の洗濯物カゴに代わっている)

話は戻り、量産していたその手箕のも、同45年頃からポリエチレン製のものが登場すると、やがて受注も減っていき、同60年には生産を打ち切ることになる。そして程なく熊手・竹箒の製造にも見切りをつけて「山田竹材」は、大きな転換を迫られることになるのであった。



五十崎大風合戦にて



原竹置場で姉と

# 光の質

田部 泉

ほぼ同じ明るさの白熱電球・蛍光灯・LEDの各ランブデータを調査実験しました。

今では日頃、照明としてLEDを活用することが珍しくないと思います。しかし、人によってはLEDは眩しくて好きでない、蛍光灯や白熱電球が好む人も少数ですがいます。それぞれの光源の「光の質」はどのようになっているのか、各光源の特長にも興味がありますのでまとめてみました。

## 1. 各光源の特長

- (1) LED 7W 電球色 寿命 40,000h (時間)
- (2) 白熱電球 60W 寿命 1,000h
- (3) コンパクト蛍光灯 15W 寿命 13,000h
- (4) 和蝋燭 (燃焼のあかり)

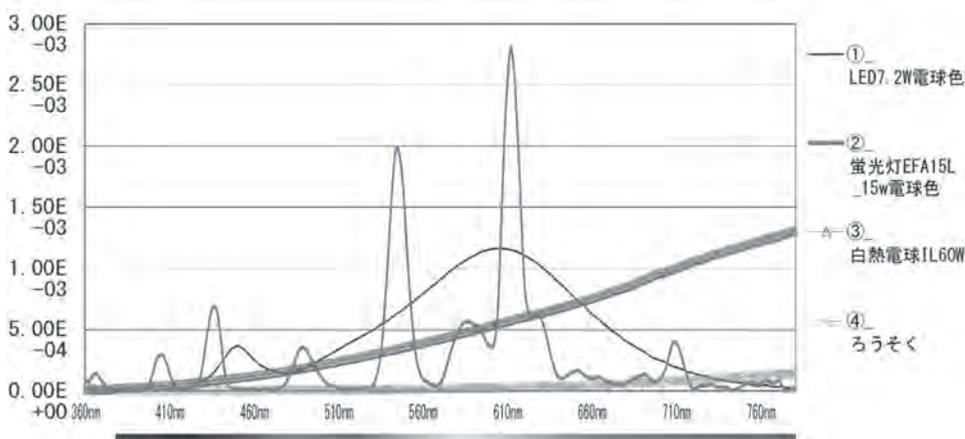
## 2. 消費電力比較

- (1) 蛍光灯は白熱電球の約 1/4
  - (2) LED は白熱電球の約 1/8
  - (3) LED は蛍光灯の約 1/2
- 長時間点灯する場所には LED がより効果的

## 3. ランプ寿命

- (1) LED は 40,000 時間
  - (2) 蛍光灯は 13,000 時間
  - (3) 白熱電球は 1,000 時間
- 多くの報道ではLEDは一日10時間点灯して約10年は持ちますと言われていますが、使用環境で短寿命になるので注意が必要です。

## 4. 可視光線 (380nm ~ 780nm) の波長



(1) **白熱電球**も和蝋燭の曲線に近く強度は違いますが同じような緩やかな曲線です。非常になめらかな曲線で心地よいあかりを得ることができます。

(2) **蛍光灯**は、約 430nm、約 550nm、約 620nm で強いエネルギーを示して、曲線がギザギザになっています。これは三波長形蛍光灯と呼ばれていて、この波長を強くして人の目に高演色に見せています。

(3) **LED** は約 450nm 付近に小さな波形が現れますが、それ以外は約 610nm の波形を最大にして緩やかな曲線波形を示します。

(4) **和蝋燭 (燃焼のあかり)** の分布図を参考にしてみる緩やかに温かな波長 (780nm) に向かって上昇しています。白熱電球に近似しています。

このように各光源の分光分布を比較検討して見ると特徴が明確になります。この表から、白熱電球は緩やかな曲線です。LED は蛍光灯よりも緩やかな曲線で白熱電球に近い波長波形だと思います。蛍光灯よりもLED、LED よりも白熱電球の波形曲線が良い。場所によって光源を使い分けることがより良い。

## 5. 演色性

色が良く見える評価法です。平均演色評価数で表します。Ra=100 に近いほどものの色をよく見せる効果があります。

- (1) LED は約 Ra85
- (2) 蛍光灯は約 Ra86
- (3) 白熱電球は Ra100

白熱電球を Ra100 としているのです、この数値に近い演色性の良い光源をセレクトする必要があります。

日本の照明メーカーのLED比率は65%を超えているようです。省エネ、長寿命、波長特性、演色性の各項目を調べて見るとやはりLEDの普及の理由が理解できます。

## 『いろ』いろいろ (1)

ATELIER SOU 東 優



ひとはたくさん色を見えています。暮らしの中にあふれるさまざまな色、感動の色、綺麗な色。春夏秋冬、自然の中の素晴らしい配色に日本人は心動かされ、衣服や食事にさえも、その四季の自然を映し愉しんできました。平安時代の襲(かさね)の色目。和食や和菓子の在り様。季節を愉しみ、さりげなく『しつらひ』の中にも映すこと、細やかに移りゆく自然の彩りを暮らしの中に表現することです。いま現代の日本人にとっても、必要な教養であり、人として感性を磨く愉しみではないかと思えます。

色は感情と結びつきます。例えば赤。太陽の赤。血の赤。火の赤。太陽が昇り、一日が明ける…明けるから『あか』。太陽の光は、大地を照らし植物を育てる命の源。光があるからこそ、暗闇から解放され、人は『見る』ことが出来るのです。火によって、人はあたたかさや安らぎを得ることができます。神の赤。神聖な赤。厳島神社の赤は平家の赤でもあるかもしれませんが、魔力に強く、災いを防ぎ、穢れ(けがれ)を祓う赤なのです。大鳥居や神殿の赤は、実に鮮やかで、命のエネルギーが躍動する色です。海の青や山の緑と対比された赤の色は、見事に素早く人の心をひきつけ、神への畏れの気持ちを引き出すのです。

民族や性別、地域で多少異なるかもしれませんが、色の持つ意味や効果を理解し、季節感と合わせて色使いを考えると、またその愉しみは広がります。



色には大きく分けると暖色・寒色があります。暖色系は、一般的に、膨張、興奮、進出の効果があるとされています。寒色系は、反対に、収縮、鎮静、後退。前に出ているように見えたり、後ろに引っこんで見えたり、大きく見えたり、小さく見えたり、心静かになったり、高揚したり、さらには、軽く見えたり重く見えたり…。色だけでなく、彩度(鮮やかさの度合い)や明度(明るさの度合い)にも関連しながら、人は大いに色に影響を受けているのです。(もちろん色をちゃんと理解するためには、光がまずあるわけですが・・・光の話はまたの機会に)たとえば、下の四角の絵。

①



②



③



④



①と②、どちらが奥まって見えますか？③と④は、どちらが天井が高く見えますか？どちらが安定感を感じますか？寝室や和室なら④もいい感じ？玄關なら？

内装(床・壁・天井)の色を考えると、部屋の広さや高さ、北向きかそれとも西向きの部屋か、何をする部屋なのか(食事、勉強や作業、睡眠や寛ぎ・・・)など、条件を確認し、必要な色の効果を探ります。

広い狭い、高低、安定不安定、開放感・閉塞感など、空間の仕上げにも大いに影響を与える『いろ』のいろいろ。暮らしに彩を与える魅力、空間の印象を左右する威力。

続きの『いろ』のいろいろは、また次回に。

# 明かりのこと

玉乃井公和

当たり前のことですが、私達の暮らしはお日様の為すところにあります。東に明け、西に暮れ、暖かく、暑く、お日様は私達すべての生きとし生けるものの直接光です。お日様の次に私達の暮らしに明かりをもたらしてくれるものは、お月様です。お月様は、少し大型のミラーボールとして静かな間接光を、お日様と同じく、何の見返りも私達に求めることなく、与え続けてくれています。

お日様は天照大神、お月様は月読命として、昔も今も、日本人の心に在り続けているということは、このおだやかな風土に生き続ける私達の、自然に対するごく自然な感謝の心の表われではないかと思えます。

はるか昔、照明はお日様とお月様の、上からの光のみでした。たまに山が火を噴いたり、稲妻が走ったり、山火事が起こったりして少しは闇を照らしたかも知れませんが、それは照明というよりは、恐怖が先走ったものではなかったかと想像します。そのうちに、人は火を起こすことを知り、それが、人がつくりだした初めての“照明”ではないかと思えます。それはお日様やお月様の、上からの照明に対して、初めての下からの照明と言えるかも知れません。

空想すれば、私達の心がキャンプファイアーや暖炉などの火、また床に置かれた行燈やスタンドなどの光、或いは火に近い色の照明に安らぎを覚えるのは、はるか昔、人々が暖をとり、獣たちから身を守ったその火から与えられた安らぎを、今も無意識のうちに受け継いでいることからではないかなどと、思いは一気に古人の団欒風景へとワープして行きます。

住まいにおける私達の夜の風景は、照明器具の発明により昼間と同じように、上からの光を大量に得ることができ、その便利さゆえにいつの間にか上からの光に慣らされ、夜も昼もないほどの明るさに私達の光への感覚は、少し麻痺しているようにも思えます。

そんな夜の明かりの有り様を、お日様は夕暮れどき、あかい光を西の空に絞りだして、私達に示唆してくれているようにも思えます。

住まいの照明を考えると、昼間の活動する光はお日様にお任せして、夜は、はるか古人へとつらなる下からの、安らぎの明かりを演出してみるのも、住まいを楽しむ一つの方法ではないかと思えます。そして私達が寝静まった夜更けには、時々お月様からも明かりをいただければ、住まいの照明は「これにて一件落着」、と言えるかも知れません。とは言え、つつい明るさの方に気を取られて、思いのままにならないのもまた事実なのですが…。



夕陽



月

# 施主と設計者との“間”



## はじめに

思い付きというものは、自分の内だけであれこれと  
思っている分には、誰にも迷惑をかけることはありませんが、その思い付きを自分勝手にも一言、「こんなことをやりましょう」と人に対して口に出した途端に、その身勝手は少なくとも数人の人達には手間やら迷惑をかける  
てしまうこととなります。

幸いなことにこの「間 施主と設計者との“間”」という、施主と設計者が共に真剣に考え、作り出された家をお訪ねして、その出会いから生み出されるまでのプロセスや、長年暮らしてみても思い等々を、施主・設計者双方にインタビューして記事にしてみよう、という私の思い付きに対して、施主の武智靖友氏、設計者の八束志郎氏、そしてこの「いしづち」の「光のはなし」の連載をして頂いております田部泉氏の、何れの皆さんも、言い出しっぺの私よりも真剣にその準備等にご協力して頂きました。先ずはそのことに、この場を借りましてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

それから、見学会も兼ねての“ギャラリー”としてお集まり頂いた皆さん、お疲れ様でした。

この施主の家へ押しかけての予定調和なしに始まったインタビュー。以下それが、うまくまとまったかどうかは分かりませんが、約15年前に施主と設計者とが見た夢と、その続きの物語をお聞きください。

(インタビュアーは、玉乃井公和です。)

## 出会い、勢いと感動と

**玉乃井** | 先ず始めに武智さんにお伺いしたいのは、家を建てようと思われた動機、キッカケは何だったのですか？

**武 智** | 家を建てる前は伊予市の近くのアパートに家内と二人で住んでいたのですが、家内も以前から

家をつくりたいという気持ちもありましたし、私も土地家屋調査士という仕事をしていたので、仕事柄常に色々な家を見て来ていて、家には興味があったんです。でも何というか、もう突然ですね。勢いですね。勢いでもう家をやりたいな、ということです。

**玉乃井** | それで家をやりたいな、と思った時に何か夢みたいなのはあったのですか？

**武 智** | 夢というようなものはなかったのですが、子供がいなかったものから、子供がいなくても夫婦が楽しく過ごせるような家がいいかなと。

**玉乃井** | それで雑誌だとか他の家を見に行ったりするとか、そういったことはされましたか？

**武 智** | 私は仕事柄車でいろんな所を廻ってまして、それで家を建てようかと決めたのは、ちょうどその当時、松前に重川産婦人科という建物が建設途中で、その建物を見まして感動しましてね。それで思い付いたんです。

**玉乃井** | 八束さんが設計をされた建物ですね。

**武 智** | そうなんです。それでその施工会社の人に「どなたが設計されたんですか？」と聞きまして、名前を教えてください。

**玉乃井** | それですぐに八束さんのところへ？

**武 智** | いきなり電話をしまして、「一般の個人の家も設計してもらえるのでしょうか？」と。それがキッカケですね。

**玉乃井** | それでもう直接八束さんを訪ねられて。

**武 智** | そうです。行きました。

**玉乃井** | 八束さんを訪ねられて、最初の印象はどんなものでしたか？

**武 智** | ですから産婦人科の建物を見ましてね、その時から何か感じるものがありましたね。ちょっとこの方は違うだろうと。

**玉乃井** | 八束さんの方はどうでしたか？最初の武智さんの印象は。

**八 束** | そうですね。割とそういったかたちを踏んで訪ねて来られる方というのは少ないのですが、結構電話でのお話の内容も濃いし、来られてからも結構熱いものをすぐに感じましてね。それで、私の建築を見て来られたということで、これまでに設計した住宅もありますから、「それを見に行きますか」と、私の所へ来られてからすぐにもう一緒に、私が設計した住宅を見て廻った、というかたちだったですね。

**武 智** | そうですね。

**八 束** | それで、彼にとって相性と言いますか、私の作品がよければ、また彼の気持ちも前へ踏み出せるのじゃないか、と思ひましてね。

**玉乃井** | まあ要するに、お互い熱い者同士が出会ったということですね。

**武 智** | もう、第一印象は大事なんです。私が八束さんの事務所へお伺いして初めてお会いしましてね。見た瞬間ですね。見た瞬間、この人だと。

**玉乃井** | なるほど。それは「縁」というものかも知れませんね。

**武 智** | そうですね。

**八 束** | こういう言葉は初めて聞きましたね。本当にうれしいですね。

**玉乃井** | やはり家を建てる時には、施主と設計者との間は、そんなものであってほしいですね。

**八 束** | そういう風に家を建てる人が、少しでも増えて、意識を持って設計事務所を訪ねる、といったことをして、そこで話のやり取りをして、そこで確信を深めて、家を建てるということを決めて行ってほしいですね。

### 殆んどもう、おまかせ

**玉乃井** | それで武智さんは、すぐに八束さんに設計を依頼されたのですか？

**武 智** | 私も色々建物を見て廻っておりまして、自分なりにこの家はいい、と思っていた家が、偶然ですけどすべて、最初の日に見せてもらった八束さんが設計された家だったんですよ。不思議と。

**玉乃井** | 何か安藤忠雄氏の設計された家も見に行かれたとか。

**武 智** | もうそれは、かなり行きましたね。岡山の児島の住宅は4回見に行きました。子供も連れて家族で。

**八 束** | これは安藤忠雄氏が80年代に建てられた共同住宅と住宅で、それを見に行かれています。

**武 智** | 弁当持参で行くんです。弁当持参で、その中で食べるのが、またこれがいいんです。

**玉乃井** | 施主としては特殊な部類に入りますね。

**武 智** | 変わっていますよね。はい。変わっていると思いますよ。

**玉乃井** | 確かに。

**武 智** | でもそれくらい好きなんです。

**玉乃井** | それでも、いざやろうという時には要望というものがあると思うのですが、それは割とスナ

リご自分の中で考えられましたか？

**武 智** | 私はもう八束さんにですね。おまかせしようと、そういう気持ちが強かったですね。家内はやっぱり希望として中庭を作りたいというのはありましたけど、殆んどもう、おまかせですね。

### 施主と設計者は真剣勝負

**玉乃井** | 八束さんはこの敷地を見られて、設計者として何か感じられるものはありましたか？

**八 束** | 敷地を見てその場でパッと何かが湧くということは、その時はなかったですね。

何回か敷地を見に来て、彼との対話の中、奥さんとの対話の中で、ご夫婦共に同じような熱いものを持っておられるんですよ。感性的にというか方向性が。家に対する考え方の軸がブレていないし。私はそれに応えられるだけの提案が出せるのか、というそちらの方が不安でしたけど、要は彼の生活スタイルをいかにしてつくるのか、ということでした。

**玉乃井** | 結局、施主と設計者との間というのは、真剣勝負なんですよ。どちらも負けるわけにいかない。設計者は現実的に、負ければメシが食えない、ということもありますから。

**八 束** | そうそう。

**玉乃井** | そして、それ以上に自分に負けるわけにいかない、ということもありますね。ですからこのケースは、どちらもが本当の真剣勝負だったと言えますね。

**八 束** | そうなんですよ。一つ間違えば“殺され”ますよ。それくらいシビアなところはありましたね。やはりやってみて後から分かったというか、最初からは分かりませんよ、彼の感性の隅々までは。ですから、それによく応えることができたな、という気分ですね。正直言って。

### 風と、目には見えないものを具現化する

**玉乃井** | それで、要望などの打ち合わせをしてから、大体どのくらいの期間で第一案はできましたか？

**八 束** | 第一案は割と早く出来ました。それで、そのプランで殆んど変更はなかったと思います。多少の補正はあったとは思いますが、基本の骨格は何も変わっていません。

**玉乃井** | 第一案が出て来て武智さんは、ビビッと感じるものがありましたか？

**武 智** | それはもちろん来ましたね。もうその図面を見

た瞬間にですね。やはり違いますよね。もう、  
図面を見ただけで分かりますよね。やはり感じ  
るものがありますよね。

**八 束** | 彼はね。先ほども言われましたが、土地・建物  
を登記する仕事をされていますから、もう本当  
に相当な数の建物を見ています。我々以上に  
見せてもらったその施主とも対話して帰  
るくらい、本当に建築が好きである、とい  
うことですね。

**玉乃井** | 設計をする側にとってみれば、本当に腹を据え  
て勝負をしないと勝てない、というか。

**八 束** | そう！

**武 智** | それは、この家に住み出してからまた変わりました。

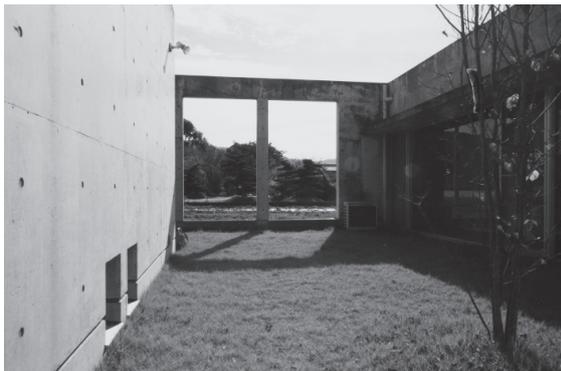
**玉乃井** | それで、八束さんがこの家のプランを考えた時  
に、何か主題のようなものはありましたか？何  
かを表現しよう、といった。

**八 束** | そうですね。色々言い方はあると思うのですが、  
先ずこの場所があまりにも素晴らし過ぎたん  
ですよ。こんな敷地を与えられて設計したこ  
とは一度もありませんでした。先ずこの場所  
に感激しました。ですからこの環境を見て頂  
いたら分かるように、あそこに山があるでしょ。  
あそこから風が、涼風が吹き降ろしてくるん  
です。

**武 智** | 大谷のね。

**八 束** | あの風をですね。現場にいる時から感じていま  
して、あの風が感じられるような家をつくら  
なければならぬと思いましたね。あとはこの  
ご夫婦が、うまく住みこなしてゆけるような  
ものをつくりたい、ということですね。

このお二人が満足して頂けるものは何かと。そ  
れは具体的なコンクリート打ち放しでもなく、  
(結果的には打ち放しになっていますけど) そ  
こに込めるべき目には見えないものを、具現化  
することが一番大事なことだろうと。それがで



きるかどうか勝負です。それがなければ彼は、  
恐らく納得していないと思います。

## プランは一発 O.K、殆んど変更なし

**玉乃井** | それで現実問題としてですね。これは施主・設  
計者双方共に大事なことですが、予算との“格  
闘”はありましたか？

**武 智** | それはありましたね。それで、どうしても予算  
の関係でそれができないのであれば、もう家は  
いらないと。もうアパートでいいと。それぐ  
らいの気持ちはありましたね。

**玉乃井** | 最初のプランを見せてもらって、ビビッと感じ  
たということですが、その図面で暮らしのイ  
メージは湧いて来ましたか？

**武 智** | まだその時には湧いて来ませんでした。

**八 束** | 彼とよく話すのですが、彼が熱い思いでプロセ  
スを踏んで家をつくられて、生活をされている  
訳ですが、彼はその15年くらいの生活をし  
てみて、そこからまた熱く熱く建築とかコンク  
リートとかを深く見るようになって来られたと  
思います。最初からそういうことではないんで  
すよね。

**武 智** | そうですね。

**八 束** | やはり建築が刺激するものがあったのかも知れ  
ません。

**武 智** | そうです。やはり実際に住んでみてから。

**玉乃井** | そうすると最初のプランで、殆んどもうこれで  
O.K.ということですね。

**武 智** | そうですね。

**八 束** | そんなに変更はなかったですね。

**玉乃井** | そうすると、産婦人科の建物を見られてから八  
束さんの事務所へ行かれて、それでも早い段  
階で信頼感のようなものはできた訳ですね。

**武 智** | そうですね。もう建物がすべてですから。もう  
八束さんの作品がすべてですので、私もそれで  
決めました。

**八 束** | 私にとっては非常にうれしいことだし、そうい  
う決断の早さも彼は持っていましたね。実際は  
結構、彼も迷ったとは思いますが。建てようか  
建てまいかと。でも彼はそれを決断できる、建  
築を見る目のフィルターを持っていると思いま  
す。だからあとは早いですよ。

**玉乃井** | そうすると実施設計の段階などでの変更も、大  
枠ではほとんどなかったということですか。

**八 束** | なかったと思います。殆んど変更はなく、大体

始めの設計通りですね。

**武 智** | 予算がない中で何とかやりたいと、そういう強い気持ちで何とかできましたけれども、これはなぜできたのかと言うと、土地があったからです。この土地がなかったとしたら、絶対無理です。父の農地がありましたからできたので、もう本当に父には感謝しています。

### もう、毎日感動していますから

**玉乃井** | それでいよいよ現場が始まる訳ですが、いつも現場は見に行かれましたか？

**武 智** | それはもう毎日ですね。今はもう父も亡くなりましたが、父も毎日でしたね。

**玉乃井** | そうでしたか。

**武 智** | はい。でも父は最初は反対していましたから。

**八 束** | 何で？

**武 智** | コンクリート打ち放しは。

**八 束** | 何で？これは初耳ですね。

**武 智** | やっぱり父には木造という頭があったんでしょうね。父の弟が大工さんをしていましたので、やはり木造という頭があったんでしょうね。

**八 束** | なるほど。

**武 智** | 最初は反対しましたが、でもそれはちゃんと説得して、それで進むことになりました。

**八 束** | すぐにお父さんは納得してくれました？

**武 智** | 納得はしてくれましたよ。それは。

**八 束** | ああ、そうですか。やっぱり熱い思いが伝わったんですね。

**玉乃井** | そういう施主と設計者との間というのは、そんなにある訳ではない、もうどちらかと言えば武智さんと八束さんとの関係というのは、かなり稀なケースになると思いますね。先にも言いましたが「縁」みたいなかたちですね。

**八 束** | そうですね。「縁」ですね。

**玉乃井** | なかなかこんな関係は、一般的にはないですね。

**武 智** | それは私が仕事柄、色々と廻っていましたが、それで色々な建物を見てきましたから、そういう点は大きかったですね。

**玉乃井** | 武智さんの場合は、実際に生半可な設計者よりは建築を見る目を持っておられるような気がします。

**武 智** | そんなことはないですけど。私はもう感じたことだけなので。

**玉乃井** | それが大事ですね。ですから本当に設計者にとっては恐い施主ですね。

**八 束** | そう、そうなんですよ。だから彼のそういう求めているものに、少しでもポイントを外していたら、彼はもう「いらぬ」と言うでしょうね。それくらいのハートを持っていますね。ハッキリしていますから。自分はこうなんだと。

**武 智** | 実際、でも住んでみて本当にいいんです。もう、どこにいても落ち着くんですね。トイレに座っていても落ち着きます。

**八 束** | 仕事していても？

**武 智** | はい。

**八 束** | 設計者にとって最高の褒め言葉ですね。

**玉乃井** | 住まいで一番大事なことは、完成してからずっと飽きることなく暮らせることですね。

**武 智** | そうなんですよ！これはもうゼツタイ飽きない。

**玉乃井** | これはもう、表層などを小ギレイに見せて、カッコいいとかオシャレといった、その瞬間だけの建物もたくさんありますけども、八束さんはこの家で、住まいの一番大事なところを設計されていたからこそ、飽きの来ない暮らしができる、ということになっているのでしょうか。

**武 智** | 15年経っていますけど、もう毎日感動していますから。今でも。

**八 束** | すごい言葉！

**玉乃井** | こんな施主はいませんね。それは、そう感じさせる「空間」をつくっているということですね。

### 変わらないもの、目に見えないものを設計する

**八 束** | やはり変わらないものってあるでしょう。それを意識することで、やはり自然と融合した生活を生み出しているのだらうと思います。住んでいる本人が、そういう風に毎日感動して、そのようなことを言ってくれますから、「ああ、よかったな」と思います。なかなかこうした施主は、そうはいないんですよ。

**玉乃井** | さっきも言われましたが、要するに設計をするということは、この武智邸はコンクリート打ち放しでできていますが、本当に設計すべきものは、そうした目に見えるものではなく目には見えないもの、「空間」というのは目には見えませんが、その中に在っていつまでも変わらない、目には見えないものを設計すべきなんですね。

**武 智** | この「空間」が大事ですね。

**玉乃井** | ですから仮に和風の家であれば、材質を吟味し

てつくるようなものもありますが、一般の家を建てる時には、やはり「豊かな空間」をつくることを考える方が、飽きが来ないというか、後世に残り得る建築ができるような気がします。

**八 束** | 「豊かな建築」とは何なのかと。それをつくるためにいつも自分の中で思うのですが、モノなどはいらない、と私は思っているのです。全然いらないという訳ではないのですが、モノがあって豊かというのではなくて、モノがなくても「空間」そのものが質の高い、「豊かな空間」があって、自然と向き合っただけで日常の生活が送れるものが先ずないと、そこに何を携えて来ててもカッコ悪い！

**八 束** | その「空間」に刺激されて、自分のセンスでそこにモノが置ける。セレクトの仕方もそこから生まれてくるようなところがある。そこから何かが変わってくる。この家を建ててみて彼は大きく建築に対して、熱いものがより熱いものになっていますね。だから「あなたは職業を変えたらどうですか」と。設計をやった方がいいんじゃないかと。そんな話をすることがよくあるんですよ。

**武 智** | ありました。そんな話をしますね。

**玉乃井** | 私もこの家には15年ぶりに来たことになりましたが、今見た方が落ち着きがありますね。15年間武智さんが毎日感動しながら暮らしておられるというのは、やはり「空間」そのものができているということでしょうね。

**八 束** | そうであつたらいいですね。

**武 智** | 魂、こもっていますから。

**八 束** | やはり15年間という時間が経って、その時間軸の中で、ああもう飽きたとか、15年前に思っていたことはこんなものだったのか、という風に思うような家ではなくて、彼はこの家を愛して、日常も楽しんで、気持ちを家の中で豊かにして行って明日を迎える、といったようにこの家で暮らして来たと思うんですよ。それはやはり彼の住まい方、家そのものを愛して、家族を愛してですね。

**武 智** | そうです！家族を愛することと同じです。一緒なんです。



## 家って、生きていますから

**八 束** | そうということが大事なことだと思うんですよ。ただ現実には、やはりカンタンにパパッと家を“立て”過ぎるといって、現代の家を建てる風潮というのは、そちらの方が八割九割、もっとそれ以上ですね。同じお金をたくさんかけて、そういうものを求めている人が多いんですよ。現実には、そうではないプロセスを踏んで、何か一歩踏み出して気付いて、何かを誰かと話してそこで大切なことを知るという、そういう段階を踏んで自分の家をつくる、ということ、なぜしないのか、と私は思いますね。

**武 智** | 建物って、生きていますからね。

**八 束** | 生きています。

**武 智** | 生きていますから、恐らく住まい手によって家は変わるんですよ。ホントに、これそうなんです。これは大事なことなんですけど。

**玉乃井** | ですから武智さんと八束さんの関係というか、設計された家がこういう風に住まわれている、ということが実は稀なんですね。

**武 智** | 家族みんながそういう気持ちですね。日々こう生活してましてね、家っていうのは生きていますから、答えてくれるんですよ。これは本当に不思議なんです。答えてくれるんですよ。

**玉乃井** | それは具体的にどういった面ですか？

**武 智** | う〜ん、なかなか言葉では説明しにくいんですけど。

**八 束** | やっぱりね。感じるものがあると思うんですよ。例えば、いやしみたいなものがあるんじゃないですか。

## 一番大事なものを粗末にして、捨て去って

**武 智** | それくらい家って大事なものだ、と私は思いますね。

**玉乃井** | そうですね。大事ですね。ところが一番大事なものを、一番粗末にしているのが現実ですね。

**武智** | そうなんです！その通りなんですよ。

**玉乃井** | もちろん家を建てるのには、現実には予算があつての話になります。皆が皆、ちゃんと設計をして家を建てられる訳ではありませんが、本気でやれば本当にローコストでもできると思うのです。

**武智** | できます。できます。

**八束** | 玉乃井さんともよく話をしますが、ちゃんとした場所を与えられて、そこに家族との対話の中で、「主題」を見つけて、その人達のために何をつくるべきか、その場所にどうつくるべきか、どういうデザインとしてその場所に納めればいいのか、ということを考えるプロセスもなしに、ありきたりのハコモノをポツと置くだけでは、こういう風なものにはならないですね。武智さんのような、家に対するスタンス・気持ちがあれば、一番大事な部分を、なぜ素っ飛ばして多くの人達が家を持つとうとするのか、これは悲しい日本人の現実ですよ。

**玉乃井** | やはり色々な意味で、スピードだけを追って来ましたね。お金の回転スピードだけを追いかけて来て、職人さんにしても何にしても、大切なものを全部捨て去っていますね。それが一番の問題ですね。

**八束** | その通りです。一番豊かになって行く要素を全部捨てて行っているということです。今の家づくりの有り様というのは、ですから建築に対する夢もない、職人になる人もいない、技を磨いて。そういう仕事もないと。全部もう工場で作られてね。そこに「置く」だけの“作業”の中で、あとはカタログを広げて色などを選ぶだけ、と。それくらいでしょ。自分の家をつくるのに、そんな悲しいことはないですよ。それが現状ですね。

**武智** | 今は雑誌とかネットで見て家づくりをする人が多いみたいですけど、そうではなくて、家を建てるのであればやはり、日頃から建物を実際に見て廻って、自分の目で見てほしいと思いますね。

**玉乃井** | 本気にならないといけませんね。私はいつも例えで言うのですが、二万円の品物を買う時でもあちこちウインドーショッピングをするのに、その千倍以上もするものを何も考えずに、カン

タンに“買って”しまうと。こんな話はないですね。

**八束** | 家というのはそういう風に“買う”ものだと。言わば“洗脳”されているのかも知れませんね。そこに何の疑問も持たないという市場があると。そんなモッタイナイと。高い既製品を“買って”。我々がオーダーで設計して建てる方が安くつくれますよ、と私は思っていますが、現状はなかなかオーダーで建てようという施主はいませんね。

### 心地好さ、安らぎを設計する

**玉乃井** | 考えてみれば家というのは、人間の“動き”が一番少なく、一番長くいる場所なんですね。

**武智** | そうです。

**玉乃井** | それでその場所をつくるのに何が一番大事なのかと言うと、それは武智さんが日々感じられていること。少し抽象的に言えば、普遍性を表現するということですね。

**八束** | そうですね。彼はそれをね、分かっているところがありますね。

**玉乃井** | その普遍性を、住宅を設計する際の言葉にすれば、「心地好さ」とか「安らぎ」といったことですね。それを設計するということですね。

**八束** | その通り！

**玉乃井** | 何もカッコ好さを一番に設計する、ということではないですね。もちろんカッコ好さも建築家（や）さんの性として求めますが。

**八束** | カッコ好さにも色々あります。

**玉乃井** | 要するに見た目のカッコ好さは、あくまで結果としてですね。

**八束** | カッコをつけるためにカッコをつけたものは、どうしようもないですね。結果としてそれがそうなただけの話ですから、やはり音楽の世界でも作詞と作曲があつて、詩が先か曲が先か色々ありますが、そこにある詩、つまり彼の「思い」が具現化したからこういう結果になっただけ、ということでこの家を見てほしいですね。形ありきでこの家をつくった訳ではありませんから。

**武智** | とにかくシンプルで、何も無い。

**玉乃井** | それでいて豊かである、と。それが設計が一番難しいんですね。

**八束** | そうかも知れませんね。

**施主の「思いが、かたちをつくる」**

**玉乃井** | 家に限りませんが、建築は要するに施主と設計者と施工者とが三位一体となってつくるべきだと思っているのですが、建物に対して一番責任ある立場にいるのは、実は施主なんですね。施主に半分以上の責任があると思うんです。言わばできたものというのは、施主の家に対する「思い」が出ている訳です。考えたにしても、何も考えなかったにしても、ですから家づくりは、施主の「思い」が一番大事なんです。その次に設計者ですね。そして施工者と。順序としては、どれも大事なものですけどね。

**八 束** | そうですね。確かに。

**武 智** | この建てた家はですね。もう私そのものと言われるんですよ。本当に言われたことがあるんですよ。「武智さんそのものですね」って。それくらい出ています。この建物は。

**八 束** | ですから先にも言いましたが、住まい手がこの家の顔をつくる。つまり違う人が住めば、そういったインパクトはないと思います。彼が住んでこそその家なんですね。つまりそうしたことが一体となって一つの作品となって行くというか、歴史ができてくるというか。そこで子供も親の姿勢を見て育って行くみたいなのところがあって、いい意味で彼は、いい環境を子供に与えたと思いますし、子供さんも違ってくると思います。

**武 智** | 違いますね。ホントに。感性違いますね。

**玉乃井** | それは全く違いますよね。子供たちは家で空間の原体験をする訳ですから。

**武 智** | ウチは子供ができてから家族3人で、6歳になるまでこのリビングで、川の字になって寝ていましたから。

**八 束** | それでいいですよ。あまり限定しないというか、どうにでも自由に豊かに使うということが。

**玉乃井** | 私はいつも言っているのですが「思いが、かたちをつくる」と。スタイルとかデザインではなく。その一番大事な「思い」は、先にも言いましたが、施主の「思い」ですね。この武智邸というのは、その武智さんの「思い」というのが本当にうまく「かたち」になったということでしょうね。稀な例ですね。

**武 智** | そうかも知れませんが。

**玉乃井** | そうですよ。それですと感動しながら暮らしているというようなことは、そうはありません

ね。でも本当は、これが理想的であるとすれば、やはり皆がそれを求めるべきでしょうね。家を建てる人達は。

**武 智** | そうですね。それがやはりスタンダードになってほしいですね。

**玉乃井** | そうあるべきなんですね。

**八 束** | 本来、そうあるべきだと思いますね。

**玉乃井** | ただ、そうあるべきものの数が少ないですから、どうしても発言力は弱いですね。もう数が“常識”になりますから。

**八 束** | そうですね。悲しいかなこれが現実ですね。

**住まいの設計の有り様は**

**玉乃井** | この家を設計されて、現場を見られて完成して、八束さんがここに住まれる訳ではありませんが、思ったよりもよく出来たとか、ちょっとあそこはもう一つだったな、といったところはありましたか？

**八 束** | そうですね。まあ予算的な事情で私の本来の設計通りにできていないところはあります。それは具体的に言えば、屋上の断熱がありましたね。それが最初の設計通りにできなかったのは残念ですね。まあそれは後になってでもやろう、ということで。当初の通り施工していれば、もう一つ断熱も違っていたのではないかと思います。

**武 智** | 落とせるところは全部ね、落しました。

でもどうしてもこの家をつくりたかったので。

**玉乃井** | 武智さんの場合は、できた時の印象を聞いてもあまり意味がないですね。もうこれだけずっと感動して暮らして来られているのをお聞きしていると。

**武 智** | はい、もう。もう本当に日々感動ですから。

**玉乃井** | 普通は出来上がった時の感動がピークで、あとは尻すぼみになったりするものですが。

**八 束** | 大体それが殆んどじゃないですか。もうすぐに消費されて。

**玉乃井** | ですから設計者にとって一番の喜びというのは、施主の「いつまでも飽きないんです」という言葉ですね。

**八 束** | そうですね。

**玉乃井** | いくら時間が経とうともいつまでも飽きない。そういうものはなかなかつかれないですよ。

**八 束** | そうですね。少ないと言うか、難しいかも知れませんが。それでも私にも20年、30年経つ

た建物はありますけど、それが時代遅れだとかいった感覚で、それが見られることはないですね。

**八 束** | 要するに時間が経っても変わらないものを、そこに流し込んでつくっておけば、時間軸の中でそういうものは逆に輝きを増してくると、私は思います。そこに込める魂といいますか、そこに深い「思い」というか、それをいかに具現化するかということが、やはり大事な事なんでしょうね。それがなければもう「建築」にならない。それを思考する訳ですね。それで「あっ、これだ!」と感じられるものがあれば、結論も出しやすいし、たぶんそれで、いいものができると思いますね。何かもう、あれこれこねくり回してやっても、そんなものはダメでしょうね。そういったプロセスでは「建築」は、できるようなものではないんじゃないですか。

**玉乃井** | そうですね。先ず形から入るのはダメだと思いますね、設計はやはり。私の場合は先ず普遍性を持った「主題」を決めるということですね。その「主題」は「縁（かかわり・つながり・作用）」というもので、私は建築をつくっていますがね。まあそれも、「空想」から見出した「理想」ですけども、まずまず“使える”のではないかと思っています。



### もう、建築が好きなのでから

**武 智** | 家ってね、ホント大事ですからね、本当に。

**玉乃井** | 本当は武智さんの意識の10分の1でも100分の1でも、一般の家を建てる人達には、意識を持ってほしいですね。

**八 束** | 結局そういうことが、本来皆の幸せにつながるのだと思うのに、それが主にならないということですよ。我々の存在があまりにも小さ過ぎるということですよ。気付かれもしないそんな

世界で悶々としているでしょ。現実には。これは一体何なのだ、と。これが現実ですよ。これはどうかと思いますけどね。だからこんな場を設けたのでしょ?

**玉乃井** | う〜ん、そういうところは... そうならないんですけど。

**八 束** | ないの? (会場笑) そうですか。

**玉乃井** | 面白いからやってみよう、ということです。

**八 束** | ああそうか、そうですね。

**玉乃井** | この施主と設計者との取り合わせが面白いでしょ?

**八 束** | なるほど。ホントにこういう機会は後にも先にも、初めてのことなんでね。ですからおもしろいね、武智さん話してください。

**武 智** | ホント、建築大好きですから。大好きなんです。

**八 束** | やはり好きじゃないと、一歩も前へ踏み出せませんからね。

**玉乃井** | 武智さんはね。先にも言いましたが、なまかな設計者よりも建築を見る目がありますね。ある新築の住宅を見られて、それを外から見ただけでも分かる。面白いことにその感想が私と同じ感想でね。そのことである日「玉乃井さん、あれを広告に使うなんて、何を考えているんでしょうね」などというメールまで頂いて。(笑) ホントにこの人は、かれこれ建築を見る目がある訳ですよ。

**八 束** | そう思いますね。やはり芯を押えていますね。

**玉乃井** | よく見られていますよ。

**八 束** | その話しを玉乃井さんとよくすることがあったんですけど、私も後でその家を見に行ったんですけど、やはりそうだな、と。

**武 智** | 私はもう、建築が好きなのでから。

**八 束** | いや、それより上ですよ。

**玉乃井** | これはね、設計者にとっては恐いですよ。(笑)

### 建物がメッセージを出していますから

**玉乃井** | やはり優れたものというのはですね、設計者でもそれ程の数ではできないと思うんですよ。それで、優れたものというのは、自分が設計をして、自分が思ったよりもよくなったりすることがあると思うんですよ。要するに“作品が一人歩きする”ということが。

**武 智** | なるほど。

**玉乃井** | ですからそのあたりのところで言えば、八束さんはこの家で思ったよりもよかった、といった

ところがありますか？それとも計算通りにできましたか？

**八 束** | どう言いますか、時間と共に彼がこの家に住んでの、彼の日常での生活の話を聞かされるにつれて、ああこれでよかったのかな、という気持ちがいじわりと湧いて来て、だんだんとある種の確信めいたものが生まれるだけでして、絶対的に始めからそんな風に思っていないし、実際に雑誌等に情報を出したりすることも一切していません。そんな、人に見せるような目的でつくった訳ではないし。

**武 智** | もう、建物がホントに毎日メッセージを出していますからね。色々な人が見ているみたいで。

**玉乃井** | 見せて下さい、という人は結構ありましたか？

**武 智** | なかなかそういう方はいないんですけど、でも突然ウチの事務所（事務所併用住宅）に電話があった時に、それは仕事依頼なんですけど、それは建物を見てそれで興味を持ってという、そういう方も今までに何人もいました。

**八 束** | まあ外から見ただけで、見せて下さい、とインタホンを押す人はまずいないですね。

### 不思議なことに

**玉乃井** | なかなか設計をして家を建てるということの意味が、殆んど一般の人には分かっていないんですね。もしかすると、設計をしている人も分かっていないかも知れません。

**八 束** | そうですね（笑）それが実情じゃないでしょうかね。

**玉乃井** | 本当は設計をして家を建てるということが、百軒に一軒でもあったとしたら、街が変わってくると思うんですね。それが1%もない訳です。

**八 束** | そうですね。

**玉乃井** | ですからこうした家の建て方を、100人に1人の人が気付いてくれたらいい訳ですね。まあそれでも武智さんみたいな人は、稀だろうと思います。

**八 束** | そう思います。

**武 智** | 稀です。でも覚悟は要りましたよ。ホントに覚悟がないと出来ないと思います。ホントに住むにも覚悟が要ると思います。

**玉乃井** | 勇気はありますか？

**武 智** | 要ります。ホントに要りますね。夏は暑いし冬は寒いですし、それは住むのにも覚悟が要ります。もちろん建てるのもホント覚悟が要りまし

たけども。でも皆のね、家族の協力もあってできました。それで不思議なことに今、子供が一人いるんですけど、その設計当時は子供がいなくて、子供がいらない設計をお願いしたんですよ。それでも八束さんが一部屋くらいは子供の部屋を考えた方がいいんじゃないか、と言われたんですけど、ウチはもうあきらめてますから、子供がいらない設計で事務所と家、ということをお願いをしたのです。その一部屋というのが今、娘の部屋になっていますが、でもこれが不思議なことに、この家は結婚して八年目に建てたんですけど、引っ越した途端に子供ができたんですよ。

**玉乃井** | ほおー

**武 智** | もう、ほんとに不思議なんです。

**玉乃井** | 不思議なことがあるもんですね。

**八 束** | それはこの家を建てて二重の喜びですよ。

**玉乃井** | それでここで暮らして感動していたら、もう最高ですね。

**武 智** | もうホントにそうなんです。でもそういう気持ちで家族皆がですね、生活していると不思議と幸せになるんですよ。だから今の気持ちをずっと生涯家族皆が、同じ気持ちを共有していたら、やはり幸せになれると私は思うんです。それくらい家は大事なんです。

### 変わらない豊かな空間、そしてゆらぎ

**玉乃井** | 結局これは、武智靖友邸として建てただけけれど、仮に将来他の人が住まわれても、同じように感じられるような家であればいいですね。

**八 束** | そうですね。

**玉乃井** | ですから我々が設計するものは、物理的にそれ程長く残る訳ではないけれど、今の建築で一番残らない理由というのは、精神的にと言いますか、心が満たされるものがないから残らないのでしょうかね。

**八 束** | おっしゃる通り。

**玉乃井** | それから“猫に小判”の人がいて、大事なものでも分らずに壊してしまうケースもあるでしょうね。

**八 束** | そうですね。そういう短命な住宅というのは、やはり家族の歴史も刻まれませんよね。だから長く住んで愛して、長く住んで初めてその家が、建築のスピリットにつながる、ということがあると私は思いますね。

**玉乃井** | 結局一番大事なことは、変わらないものを設計するということですね。

**八 束** | そうということなんですよ、結局はね。それさえ入れ込んでおけば、やはり何かを感じて住まい手は、武智さんのようになって行くのじゃないかと思うんです。それくらい、建築には力があると思うんですよ。そういうものをつくればね。

**玉乃井** | ですから変わらないもの、つまりは「豊かな空間」をつくっておくということですね。そこに入る、例えばここではこのトプライトからの光は、実は日々刻々といつも変わっている訳ですが、その移ろい行く“ゆらぎ”が武智さんに心地好さを与えるのでしょね。

**武 智** | そうですね、はい。昼も夜も。昼の顔と夜の顔があります。

**玉乃井** | 月の明かりがね。

**武 智** | そうなんです！これがまた神秘的なんですよ。ホントに。

**玉乃井** | トプライトの一番いいところは、月明かりですね。

**八 束** | 柔らかいし、色っぽいですね。

### やっぱり見て、聞いて、体感して

**玉乃井** | 武智さん、実はこの「いしづち」の収録は、一般の人達に読んでもらえるような誌面にしたいと思っているのですが、これから家を建てようと思っている人達に対して、何かアドバイスのようなものがあれば、お聞きしておきたいのですが。

**武 智** | 先にも言いましたけど、雑誌とかインターネットだけではなく、やっぱり見て廻ってほしいんです。それで感じたらもうアポなしでインタホンを押すと。それくらいしなないといい家はできません。私はそう思います。もうこれはゼツタイ！実際に見て聞かないと。もうそれが一番ですから。それをしないとダメです。

**玉乃井** | そうですね。

**武 智** | でもなかなか皆さんできないのでしょけども、それをしないとダメです。

**玉乃井** | 実際、「空間」というものは三次元だけれども、その中に「時間」というか“動き”がある訳でしょ。光でも何でも。要するに四次元の世界なんです。その四次元の世界を、写真の二次元に納めるのは無理なんです。

**八 束** | そうということですね。

**玉乃井** | だから実際にその「空間」の中で体感するしかないんですね。やはりその一言に尽きるかも知れませんね。

**武 智** | もうこれはゼツタイです。そう思います。

**玉乃井** | やはりお金を粗末にしてほしくないですね。

### もっと自分を大事にして

**玉乃井** | 八束さんも何か一言。一般のこれから家を建てようと思っている人達に対して、八束さんなりのアドバイスを。

**八 束** | そうですね。言いたいことはありますが、現実的には言ってみても、叫んでみても、それに振り向く人は少ないですね。玉乃井さんも言われている通り、この世は「縁」だと。一般の人達に対しては、あまり言うこともありませんが、要は出会うか出会わないか、だということですよ。

**玉乃井** | そうすると今の時代は、「縁」が薄くなっているのかも知れませんね。

**八 束** | そうそう、相当薄いんじゃないですか。

**玉乃井** | 時代のエネルギーも人間のエネルギーもありますしね。

**八 束** | その通りですね。どうせ人生一度ですからね。やはり自分の「思い」のある住まいを構えて、そこで自分らしく暮らし、生きて行くようなことでいいんじゃないかと思うんですよ。

**武 智** | 私も仕事柄ですね。住宅関係のつながりもありますけど、自分の家ですから、家族が住む家ですから、いい加減なものだったら止めよう。とにかく自分の家族が住む家をつくりたい、という強い強い気持ちがあったんです。

**八 束** | もうそこが命ですね。

**武 智** | そうなんです！

**八 束** | 一本の赤い糸なんですね。自分と家とをつなぐ。大体は世間はそうではなくて、どこそこに知り合いや、親戚の中に大工さんがいるとかどうかいったことで作ってみて、失敗さえも分らずにいると。要するに、もっと自分を大事にしてほしい、ということですよ。

**玉乃井** | そうですね。自分を大事にすれば、お金の使い方もちゃんとできると。

**八 束** | その通りですよ。

**玉乃井** | なかなかそれが、世の中には伝わり難いですね。

**武 智** | 設計者も皆が、やはりそのあたりを考えてもらって設計してもらわないと、難しいところはあるかも知れませんね。

**施主も設計者も、自分を表現すること**

**玉乃井** | やはり時代というものもあるのかも知れません。「縁」にも。

**八 束** | まあ平成時代というのは、我々が心配していることは、これから増々そのような、自分を大事にしない方向へと行って、軽くなっていくような感じですね。

**玉乃井** | 貧しくなって行くと。

**八 束** | 貧しくなって行くでしょ。そういう傾向は、増々強くなっていきますよ。つまりそういうことを話して、会話して行ってそういったことが大事だなんていう、ちょっとした気付きの場のようなものが、どこにもないですね。

**玉乃井** | ですから今日も、この場に若いこれから建築を目指そうという人達もおられますが、もしも設計を目指すのなら、設計というのは形のないものを設計するのだ、ということを知ってほしいですね。それでこういう武智さんみたいな施主と出会って、真剣勝負をしてみると。一生に一度でもね。

**八 束** | そうですね。この武智邸はもう設計から現場が終わるまで、非常に楽しかったですよ。やはり建築をつくるのなら、常にそういう現場でありたいですね。それには設計者は、内から自分を表現する、素になって表現する。そして施主も自分を表現して下さい、と。自分を表現しなければ、あなたの家はできませんよ、という話じゃないですか。

**玉乃井** | 武智さん、現場は楽しかったですか？

**武 智** | もちろん楽しかったですけど。まあ出来上がるまでには色々なことがありましたね。台風もありましたしね。色々そういう心配もありました。

**八 束** | やはり出来上がるまでは、ものを見て自分がここに、空間に身を置いてどうなる、といったことは、確信はないと思いますよ。そうだと思いますよ。やはり現場で、不安げな顔をして問いかけて来ることもありましてね。

**玉乃井** | それはもう、設計者でも全てが分かっている訳ではありませんから。大体こうなるだろう、というところですからね。

**八 束** | そうそう。

**玉乃井** | 本当は家を建てるということは、そのお金に見合ったホントに面白い話なんですけども、皆殆んど面白くない話で始めて、終わるとということ

ですね。

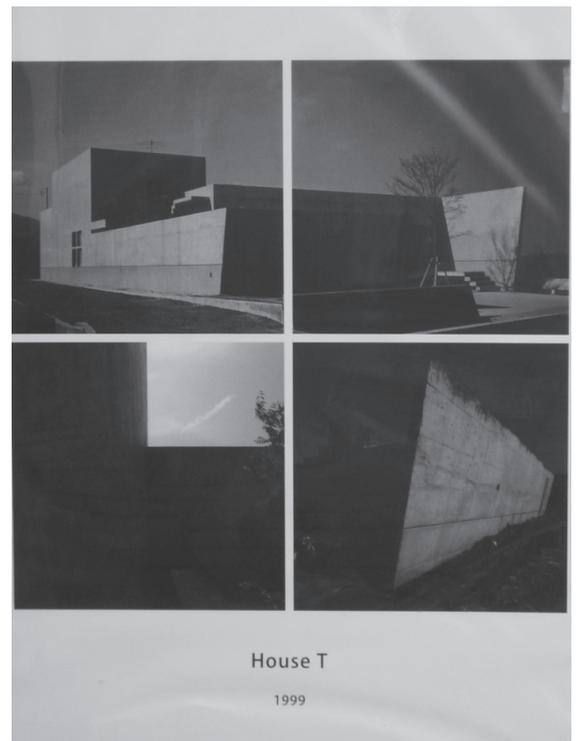
**八 束** | そうだなあ

**玉乃井** | ここでボヤいてみてもしようがありませんが...

**八 束** | 最後に一つだけいいですか？日本の巨匠・建築家・丹下健三氏の残された言葉があるのですが。皆さんご存知かもしれませんが。

「人の肉体を心地好くさせ、目を見張らせ、そして精神を感動させる美しさ。建築空間は美しいものでなくてはならない。美しいもののみ機能的である」、と言われていています。これを今日は言いたかったんです。

**玉乃井** | 素晴らしい言葉ですね。素晴らしい言葉が出たところで時間も来ました。武智さん、八束さん、そして“ギャラリー”の皆さん、本日はご協力いただき、ありがとうございました。



(収録・平成26年11月16日 武智靖友 邸にて)

# 特集 年男・年女（羊年）

特集 年男・年女（羊年）

8

## 還暦を迎えて

新居浜支部 藤縄 司

私の生まれた昭和30年、戦争が終わり10年まだまだ復興途中の頃でした。

小さい頃、住む家も隙間風が入り夜中に寒さで目が覚めたり、食べ物も野菜や魚等中心の実に質素で着るものも当時高価でしたので親戚などから送ってもらった記憶があります。日本も高度成長期を経て現在は物があふれ、何不自由のない生活が送れるようになりました。

しかし現在、拝金主義の世の中になっているように思えて仕方ありません。昔の日本人としてのよさが失われているような気がします。

人と人の関係を大切にして思いやりの心で充実した人生を送れるように心掛けたいと思います。

## 還暦と言われても？

新居浜支部 兵藤 信二

満60歳を迎えると還暦と言われるそうですが、文字から受ける意味だと元に戻るとかまた一から始まる歳のように書かれております。私の場合は、まだまだ人生の区切りをつける所までいけてないと感じているのが実情です。平均寿命が、男も80歳を越した現在において60歳は、まだ人生の後半に入ったばかりだと思います。

建築に置き換えると基礎ができ 躯体ができ 外観が決まり 今から仕上げの時期に入る頃ではないでしょうか。今から色が付き飾りがついていきます。

70歳、80歳と今までの人生に良い仕上げを施せるよう これからも学習をし経験を積み重ねて生きたいと思っております。

余り目立たない でも 世間に役立っている人を目指して年を重ねて生きたいと願っております。

## 年男の抱負

西条支部 汲田章太郎

新年明けましておめでとうございます。

本年は3回目の「年男」。

大病も無く無事迎えることができました。

かつて30代半ばといえば、

良い大人であり、ずいぶん遠いものと思っておりましたが、

実際自分がなってみると、

自身の経験不足、勉強不足と感じる場面も多々あり、まだまだなのだと感じる日々です。

次の年男を迎える時には、思うような自分となるため、

これからも、より一層の研鑽を積んでいきたいと思っております。

## 【I wish so that it is good one year to everybody】 tosiotoko

周桑支部 妄想大好き年男の黒光俊秀です。

- Q1 今年のあなたの抱負は？  
 今年も例年同様、【着手大局、着手小局】の実践でしょうかね
- Q2 今年のあなたの運勢は？  
 今年も例年同様 泣かず飛ばずでしょう
- Q3 今年 2015 年を一言で予想してください  
 有吉とマツコが席巻するでしょう（ミツツと大吉もそろそろきそうです）
- Q4 majimeni kotaete kudasai!  
 I'm sorry!  
 今年も、皆さんにとって良い一年となりますように…

## 年女の抱負

今治支部 近藤 佳代

新年明けましておめでとうございます。

今年で4回目の年女となります。大学を卒業して25年。実に四半世紀の間、建築に関わってきたこととなります。時が過ぎるのは早いものですね。

いつまでも新鮮な気持ちは忘れずにいたい。そう思いつつ、色々な事にチャレンジする毎日です。今年は、初めての愛媛マラソンにチャレンジします。42.195 kmは私にとって未知な世界ですが、ぜひ完走したいと思います。応援よろしくをお願いします。

皆様方にとっても今年が素晴らしい一年となりますよう、心からお祈り申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

## 分岐点

今治支部 藤山 敬晃

新年明けましておめでとうございます。

昨年末、本原稿の依頼を頂くまでは、今年が年男であると全然意識をしていませんでした。

ここ数年、公私共に自分自身もいろいろと成長させていただき、今年が年男ということもあり、一つの分岐点にしようかなと考えております。

まだまだ弱者ですが、今後ともよろしくをお願いします。

## 歳男

松山支部 赤根 良忠

はやいもので今年の「羊年」で還暦60歳となります、他人のこのように思っていたら自分のことになってしまいました・・・

節目を振り返ると 48歳・仕事に追われる毎日、建築士会青年部卒業

36歳・独立してまもなく仕事に子育てに紛争、建築士会青年部で活動、24歳・建築士目指して少し取り組んでいたかな？

この仕事に就いて37年が過ぎ建築士会に携わり36年になりますがもう少し仕事もしたいし、士会にもお世話になりたいと思います。還暦の羊年を有意義に過ごしたいです。

## 年男の抱負

松山支部 相原 昌彦

二度目の建築士事務所登録の更新を終え、「10年もったか。」と実感しました。まだ手で数えられる程の建物しか設計していませんが、「これは良い」・「ここは失敗」と、施主様から直接評価を頂き、設計の難しさと醍醐味を噛みしめています。

母が「未年の子は羊と同じで、よう群れる。」と言っていました。時に友人知人・先輩後輩、仕事関係者と場面に応じて群れています。建築士会の皆様には、イベントやセミナーでの活動の合間に、悩みや迷い事を聴いてもらい、頂いたアドバイスに強く背中を押されました。

さあ、次の更新を目指して「前へ前へ！」

## 「還暦を迎えるにあたって想う事」

松山支部 黒田 利彦

今年、初めての還暦を迎えます。

思えば、中学校時代の先生の何気ない一言で建築の道を歩んで四十数年経ちました。自分で営業をし、自分で設計し、自分で施工した物件も数件になりました。

子供たちも親父の背中を見ながら建築の道を歩んでいます。親の責任の大部分は果たせた気がします。

そんな時に、中学時代の同級生と出会い、当時の話題で盛り上がりました。そこで、還暦の記念に愛媛新聞の「卒業しても」に投稿することになりました。

夏頃から準備をし、何回か集まって相談するうちに、いつしか中学時代の思い出が鮮明に蘇ってきました。

すでに亡くなっている友、住所不明の友などもいます。

しかし、多くの方は、それぞれの舞台で活躍しており、リタイヤした後は、多くの同級生がいるこの街へ帰って月見をしたり、花見をしたり、ゴルフをしたりという場所にしたいと思います。

いつでも帰ってくれば、誰かが迎えてくれるそんな同級会にしたいと思います。

伊予支部 隅田 英久

新年明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします。

さて、私も若いと思っていましたが、あっという間に還暦を迎える歳になりました。まだまだ若い者には負けられないと、気持ちの上では思うのですが、やはり体のほうが衰えてきており、最近特に感じます。年男は自分の人生を考える節目の年であり、これまでの自分を反省し、今後の目標を立て直すよい機会であるそうで、私もチャレンジしようと思います。また、十二支の性格を調べてみますと、未年生まれは「初年は苦労が多いが、中年ころより良運に向い、60歳ころに運勢最も盛んとなる。」と書かれてありました。大いに期待したいものです。何か取り留めのない文となりましたが、私の抱負と致します。

## 還暦と四国 88 か所

伊予支部 渡辺 大記

還暦とは、十干十二支の組み合わせが60種類あり、干支が一回りするの60年となることらしい。

周りの流れに身をまかせながらも何とか今日まで健康で過ごす事ができたのは妻や家族、そして周囲の方々の温かい支えがあったからこそと感謝しています。

又、還暦は数えて61歳男性の厄年でもあるといわれています。社会的な変化や体調の変化が起こりやすい年齢になったんでしょうね。そこで今年こそ「四国88か所の結願」をめざして（現在35年間余り道なかばで中断中）参拝し、厄を払いたいと思います。

皆様、お体を御自愛ください。

## 年男の抱負

大洲支部 徳山 昌弘

私は、今年36歳になります。大洲市で、親父と一緒に工務店を営んでいます。私が、建築の道を志したのは、小学生になるかならないかの頃でした。物心がつく頃には、親父と一緒に現場まわりをしていました。その様な環境から、「大きくなったら、大工さんになりたい。」と思っていました。今思えば、洗脳ですね。

今年は、自分でも飛躍の年にしたいと意気込んでいます。誠心誠意ひとつひとつの物件と向き合い、大きく成長できる年にしたいと思います。

## 挑戦と調整

八幡浜支部 藤本 哲也

36歳になります。振り返ると前回の年男の頃はただ漠然と生きていました。今は新たな事にも挑戦！！苦手な事にも挑戦！！恥ずかしい事にも挑戦！！自分なりに充実した日々を過ごしています。いろいろ挑戦しているといつも午前様です。1歳の息子と顔を合わせるの朝だけです。忘れられない為に、いつも私が『父ちゃん』であると言い聞かせています。挑戦する事は大切ですが、これからは調整も大切にして家族との時間を作りたいと思っています。

## 還暦を迎えて

西予支部 清家 直

60歳？若い頃還暦と聞けばおじいちゃんというイメージでした。  
俺って、今年周りから見ればおじいちゃん？全然実感がわかりません。  
確かに、目も悪くなり、気力も体力も衰えているのは感じていますが。  
思えば40年前の大学のゼミ、就きたい職場の1位は、「設計事務所」でした。  
それだけ当時は設計事務所が夢のある仕事だったのです。

設計事務所に就職して独立し36年。「無から有」の、そして「計画から完成」の喜びを初めて経験した時の、あの達成感は今も忘れられません。この間、耐震偽装問題などがあり、それに伴って法律も世間の見方も変わってきました。

先般“将来なくなる職業”というのが出ていましたが、設計士がランクインしていない事を祈ります。  
俺にはこの仕事しかないので、残りの人生、精一杯頑張りたいと思います。  
(実際、年金もないので働かないとしょうがない……笑)

## 40年ぶりの出会い

西予支部 大塚 晃

夏に突然のTEL「おれや、高校の時のTや！」と、40年ぶりの声にじんわりと高校生活がよみがえった。

数日後松山で当時の20数人に出会い、40年ぶりの年月のたった顔から名前を思い出し、なつかしい時代にもどり楽しい時間を酒とともに過ごした。

一人の一つの電話のおかげで、また新たな門出・喜びを与えて頂き深く感謝致しております。

お互いに健康に留意し、出会いを大切に長く仕事に・生活に・満喫できるよう取りくみ。またの再開を楽しみにしたいものです！

## 新年明けましておめでとうございます。

宇和島支部 二宮 哲也

早いもので、今年でもう60歳になるなんて、いやですね。気持ちは、まだ、40代で、止まっています。今までガムシャラに一生懸命やってきたけど、もうそろそろ、ゆとりある生活とやらに移行しなくては、愛する嫁に悪いかな。今までは、仕事一番でやってきましたけど、これからは、家族、特に嫁さんとの時間を大切にして、もう少しだけ頑張っていくかなと思います。愛する皆さん、応援してくださいね。今年が皆さんにとって良い年でありますように。

## 私の喜び

宇和島支部 兵頭 定幸

新年明けましておめでとう御座います。

私も今年は当り年を迎えまして、建築士会に昭和34年入会をし、それ以来、一時途中何年か退会した事も有りました。当時の、建築確認図面は、手書きで仕事から帰り一夜描けてしたことも有りました。私も今では、建築の仕事の中でも、高齢者に成りましたが、現役で仕事を喜びに至って、今後も建築士会の若い方の助言を貰いながら1年又1年と頑張っていきたいと思っています。

# 第57回建築士会連合全国大会 ふくしま大会に参加して

宇和島支部 酒井 純孝

秋晴れが続き秋祭りも終わり南予宇和島にも、日一日と秋が深まり少し肌寒くなりつつある頃、毎年建築士会の全国大会が開催される。2014・10・24 本部ルートで福島大会に宇和島から山本様と参加、宇和島支部ルートも参加をさせて戴きました。

会場は多目的に使用されるように設計されていて非常に広い。

東日本大震災には原子力発電所の事故のため避難所として数千人の受け入れをしていた施設でもありました。

会場の多目的展示ホールに全国の高校生から選出された作品と伝統的技能者のすばらしい作品が紹介されました。特に伝統的技能者の作品は、ただひたすらに自らが技術を磨き、こだわり抜いた作品の展示はすばらしい物ばかりでした。宇和島の山本文義氏の作品の紹介もされていました。

展示は【四国八十八箇所 四十二番札所佛木寺の楼門の作品】

次に私は古建築に興味があり部屋を移動し、ヘリテージマネージャーの会議に参加させて戴きました。

## ■ヘリテージマネージャーとは

循環型社会における建築のあり方を見据え、地域に眠る歴史的建造物の保全、活用を推進すること。地域固有の景観を回復しつつ誇りのもてる地域造りに貢献すること。

そのためには下記のようなことが求められる。

- 1・地域に眠る歴史的建造物を発掘し、再評価する能力が必要。
- 2・歴史的建造物の保全・活用提案ができる能力が必要。
- 3・地域固有の文化・風景について常に研鑽し熟知していなければならない。
- 4・伝統工法の知恵に学ぶ謙虚さと確かな技術力が必要である。
- 5・地域に入り、地域の人たちとともに汗を流し、歴史的建造物が地域の財産として地域ぐるみで大切にしていける環境づくりを行っていく能力が必要。
- 6・建築士が本来求められている能力と歴史的建造物の保全活用といった文化財保護的な考え方が両立できる能力が必要。

建築士会は以上のことを習得された方々を全国的に求めようとしている。ちなみに全国で2/3の地域が研修

会や準備を進めている報告を受けた。

そのためには研修時間は延べ14日間、60時間位研修を求められる。

(公社)愛媛県建築士会には、この事について検討されていない状態であるので理事会にお諮りをいたして進めて参りたいと思いました。

次に記念講演の会場に移動

一般社会の市販車でトップメーカーのトヨタがF1のレースに参加して優勝までの講演を聞きたいと思ひ会場に行けば座る事のできない状態でした。

トヨタ自動車(株)モータースポーツ部主査 高橋敬三氏の講演でした。

テレビなどで見ると華やかなレースの状況が放映される。その裏方はあまり写されない

そのスタッフの苦悩などを楽しみに置き換えてのお話でした。

レースにはエンジンやシャフトの耐久性が求められ自社で造りレースに望むが、ことごとく失敗に合う、自社製品のエンジンを完成させる。それにはスタッフ600名の参加でチームワークで完成させた。ただ一つのこだわりと忍耐力であったことを、いとも簡単に淡々とお話される。レース部の会社は外国に設立し文化や習慣の異なる国で一つの目標に向かう高橋氏は言葉に言い表せない事の遭遇にあった事が想像できる。

松下幸之助の話に「愚直に生きる」等の言葉があります。又、勝海舟の言葉に

「事を成し遂げる者は愚直でなければならぬ」の言葉があります。

このような先人達が到達した言葉が似合う今年の福島大会であったと思ひました。

「ならぬことはならぬものです」

一日でも早く復旧工事が進んでいきますように。

最後に人それぞれであります。不器用でも良い、ひたすら自分流に、社会と共存させて戴く道の現役であるよう努めて参りたいと思ひます。

## 一言感想

全国（ふくしま）大会報告

9



ビックパレットふくしま

福島大会は「建築・絆・再生」を肌で感じる大会でした。昨年までの郡山市には、地震で被害を受けた校舎や、放射線量測定値を知らせる看板が数多く残っていましたが、今年はすっかり景色も変わり、元気を取り戻していました。

郡山市は、自らの被災を語らず、県内各地からの被害者の受け入れを行ったと語る知事や市長の言葉にも感動しました。福島の風評被害を払拭するのも、この大会に参加した私達建築士の努めですね。

新居浜支部 越智 省二



私は、全国大会に参加するきっかけで、初めて福島県に行き、建築士会員との交流や、日大工学部でロハスの家研究プロジェクトに接することができ、楽しかったと思います。欲を言えば、福島其自然や伝統・文化等に接することができれば、さらに印象深いものになったと思います。

新居浜支部 白石 公成

- 私とふくしま -

東日本大震災の爪跡が残った中での「ふくしま大会」の開催に、応援したくて西条支部6名の仲間と参加しました。

大会では、情報発信セッションの展示を見ていた時に、福島の会員から色々な説明をしていただきました。その方の話の最後に、福島は、まだまだ写真のような復興・再生は一部だと、苛立ちの表情を浮かべていました。当時、会場となっているビックパレットふくしまが、避難の方でいっぱいになり、このような建物が火災の時には非常に役にたった話に東南海地震等への備えをしなくては感じました。

最終日は、羽田空港へ行く途中に日本大学工学部の内にあるロハスの家群や、県農業研究センターの見学が企画されていました。

工学部のキャンパスに、19年振りに足を踏み入れた私は、原発被害を克服した母校に感激しました。第64回学園祭の最中でもありました。

今回のふくしま大会で、大きな成果は愛媛県支部の建築士会の会員の皆さんと交流ができたことでした。大変お世話になりました。

西条支部 山田 順



福島県建築士会女性委員会がまとめた「考えよう！明日を担う子供たちのための住まいづくり～放射線対策住宅を考える～」の冊子が大会資料の中に入っていました。放射能におびえながら子育てをする母親の思いに寄り添った女性ならではの研究だと感銘を受けました。

今治支部 石丸真智子

郡山市で開催されました。震災で被害を受けた危険な施設は修繕、改修され復興の歩みは着実に進んでいるようです。大会式典のオープンアトラクションで震災復興のシンボルとなったフラガールのフラダンスショーで、元気と勇気をもらいました。

福島の自然の雄大さと歴史や文化を感じる旅でした。

松山支部 大上 恵子



フラガール

就職してからまだ半年の私には知らないことばかりで、今回はいろいろと勉強になり、とても貴重な経験をさせて頂きました。建築士会の行事は勿論初参加で、突然参加することになり大変緊張しておりましたが、皆様がとてもご親切にして下さったこと、とても感謝しております。

今後ともまたどうか宜しくお願い致します。

松山支部 小泉 貴央

「ビックパレットふくしま」すばらしい会場でした。セッションは、「ヘリテージマネージャー大会」に出席しました。

愛媛の遅れを実感し、寺尾会長と早速スタートしなくてはと話しました。

大会前夜には、ホテル近くのライブハウスにて、マスターと駅助役さんのギター演奏で1ステージやってきましたよ！

松山支部 武内 邦彦



私にとって山形に続いて2度目の東北の大会でした。

郡山市は平安時代には「安積の沼」と呼ばれていた土地ですが、明治以後にわかに発展して、いまや東北産業の拠点と言われているそうです。新幹線駅の風格、縦横に走る幹線道路の広さ、道路沿いに立地する物流倉庫群に都市の勢いを感じました。

又、日本大学工学部「ロハスの家」見学では、世界最先端、未来が見える研究もさることながら、我々見学者一行に90度腰を折ってお辞儀をする学生の礼儀正しさに感銘を受けました。

松山支部 二宮 廣史

帰路、見学した日大口ハスの家は、一応前調べをしていたので興味深く説明を聞き見学できた。時間不足で実験棟（ガラス張りの家）の内部などの見学ができなかったのは残念だった。

福島県農業総合センターは、松田・平田建築事務所の設計で、木造施設部門で農林水産大臣賞を初め、公共建築賞で優秀賞などを受賞。農業各部門の中核としての活動に拍手を送ろう！

帰路の車中から、震災の被災者仮設住宅を垣間見て、改めて、復興遅延の現実を見せられた想いで心痛む。

松山支部 二宮 初子



震災後3年7ヵ月、困難な中「ふくしま大会」が開催された事に敬意を表します。オープニングでのフラダンスショーや、小学生によるマーチングバンドの美しいサウンドに、それぞれの立場で「ふくしまを元気」にとの思いが伝わってきました。一日も早い復興を願うばかりです。この意義深い大会で会長表彰をいただき、ありがとうございました。又、不注意で足を痛め車いすのお世話になりました。皆様のやさしさに感謝です。

松山支部 田中 羊子



交通渋滞と事故で郡山到着が1時間ほど遅れてしまいました。郡山は遠い。

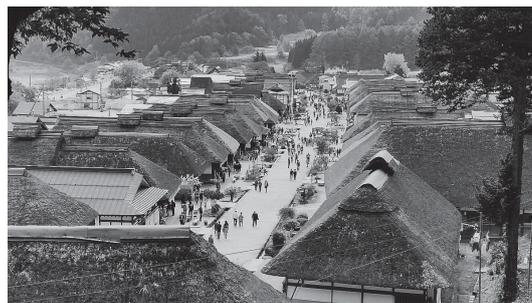
日大工学部口ハスの家では伊藤准教授の丁寧な説明で、一同興味深々で聞き入っており大変勉強になったと思います。

全国大会はプログラムも半分以上進んでおり来年の石川大会に思いは馳せていました。

楽しい夜の宴会は飲む量が半端でなく、日本酒のある銘柄が無くなってしまふ状態で請求が怖くなります。料理もおいしくいただきました。

翌日は交通の混雑を予測し大内宿へ。伝統的建築群の指定を受けているだけに街並みが素晴らしい。大洲の街並みを何とかしたいとの思いをいさながら「そば」と交互に箸代わりのネギを食べます。早朝から2食めです。予想通り帰る頃には渋滞が始まっていました。猪苗代湖畔の野口英世記念館は時間の都合上割愛し、湖畔のドライブインで昼食。快晴の中、紅葉の始まった磐梯山と猪苗代湖を満喫し、訪れたところは少なかったですが充実した全国大会への参加となりました。

大洲支部 神田 孝一



大内宿



久しぶりの全国大会の参加です。  
 今回は特に東日本大震災の津波の被災地を一度は見た  
 くて早いうちから参加を希望していました。大会前日  
 被災地（関上地区）を訪れ、眼にした風景は被災地の  
 ほんの一部でしかありませんが、広大な土地に雑草だ  
 けが伸びている風景を見るだけで、津波の被害の多さ  
 が今でも想像できました。復興にはまだまだ時間がか  
 かりそうです。  
 大会当日は早朝より大会会場に出向き、暫くすると本  
 部の団体の人達と会うことが出来ました…このような  
 場所で会うと何か嬉しさを感じます。  
 大会式典については他出席メンバーが書くと思います  
 のでここでは省略を致します。  
 その後宇和島支部は大内宿・裏磐梯高原・鶴ヶ城・飯  
 盛山等福島の歴史と合わせ紅葉の美しい東北の秋を満  
 喫しました。  
 そして帰りの飛行機からは山頂に雪の積もった富士山  
 が私たちを見送ってくれました。

宇和島支部 水野 日出夫

10月23日～25日の3日間、福島大会への参加と  
 なり、空路での仙台入りし、上空からの景色、福島  
 の様子は復興を感じられる場所、まだまだ手つかずの場  
 所など色々考えさせられる3日間でした。

宇和島支部 豊田 康夫

本大会参加前日に仙台空港近くの関上地区津波被災地  
 を視察。堤防の護岸工事が進む一方、住宅地は被災し  
 たままそこだけ時間が止まっているかの様子にショッ  
 クを受けました。福島大会においても、原発事故の写  
 真パネルや説明をして下さった方のお話で震災が過去  
 のものではなく、現在も続いている現状をあらためて  
 認識させられました。その後、会津地域の大内宿、さ  
 ざえ堂、鶴ヶ城などを巡ると観光の賑わいもあり、復  
 興へ向かって進んでいることを感じました。  
 天気にも恵まれ、会津磐梯山や猪苗代湖など福島を  
 代表する豊かな自然に触れられたことは震災の負のイ  
 メージを払拭する体験でした。

宇和島支部 與那原 浩



福島県農業総合センター前で

# 第6回いまばりのまちをつくろう絵画コンクール 「今治にこんな学校があったらいいな！」開催報告

今治支部 地域実践活動委員会委員長 曾我部 準

今治支部では毎年『いまばりのまちをつくろう絵画コンクール』を開催し今回で第6回目を数えます。昨年引き続きテーマは「今治にこんな学校があったらいいな！」とし、7月上旬に市広報と教育委員会を通じて作品を募集しました。今年の応募作品数は387点と昨年より9点増えました。

募集締め切りは9月4日（木）、審査会を9月10日（水）に市民会館大ホールにて特別審査員10名と支部有志により入選20作品を選び、その中から特別審査員賞10作品を決定しました。今年は地元の協賛企業4社より特別審査員賞を設定していただき審査会にもご参加いただきました。

展示会は10月11、12日に市内の美須賀コミュニティ1階ホールにて実施、多数の方々にご来場いただきました。展示会では応募作品を全点展示するとともに今年も4つの企画展示ブースを設けました。1つは今治出身の建築家、丹下健三氏の作品を紹介する展示。2つ目

は特別協賛企業による展示。3つ目は市内小学校で実施された特別授業においてこどもたちによる理想の校庭を模型にしたもの、4つ目は建築士の日のイベントで実施した「おかしなまちをつくろう」です。3つ目の企画展示では今年も特別授業を指導された丹下晴美先生の情熱的な解説を拝聴することが出来ました。

表彰式は展示2日目の午後に開催。特別審査員賞10作品と入選10作品の表彰の後、支部長賞受賞作品の模型と前支部長による講評を行いました。

また、今年の支部長賞模型はあまりの煩雑さにいつもの模型製作者の手だけでは足りず、さらに延20名の支部有志の手をかけて製作しただけあって今までに無い最高傑作となるとともに、学生時代のコンペ模型の製作を彷彿とさせる状況を生み出すこととなりました。展示会後の慰労会ではその話に花が咲いたのはいうまでもありません。苦勞もしましたがその分、支部会員の絆が深まった今年の絵画コンクールでした。



# ソフトバレーボール大会報告 (優勝チーム)

四国中央支部 石村 卓也



四国中央支部

11月8日、毎年恒例の青年部ソフトバレーボール大会が、西予市野村町乙亥会館で開催されました。

会館に着いてまず目についたのが、両国国技館をモデルにした方形型の建物です。相撲の雰囲気が伝わってきました。

中に入っていくと、入り口ホールに歴代力士の写真や手形が展示されていました。そしてアリーナの吹き抜け部分には、大相撲開催時に姿を現す吊り屋根が吊るされており、ここで今回のソフトバレーの熱戦が繰り広げられました。

県内各支部から9チームが参加しました。今大会はルールが変更され、例年の2セット先取から7分×2セットのトータル点数が高い方がトーナメントを勝ち上がるというシステムになっています。

試合間隔が空かずスムーズに進んで行くので、個人的には良かったと思います。

組み合わせ抽選が終わり、初戦は大洲チームとの対戦でした。ホームという事もあり、かなりの熱気が伝わってきました。

私たちの方は初戦ということで、体が硬直しいつもの動きが出来ずに苦戦しました。



中盤から徐々に体がリラックスし、なんとか勝利する事ができました。

2試合目のチームアンディとの対戦は、序盤は相手チームの勢いにおされリードを許してしまいました。

試合の流れを変える為にチーム皆で声を出し合い、ミスをして盛り上げてプレーをした結果、勝利する事ができました。

午前中の試合が終わり、支部交流昼食タイムで各支部のチーム紹介が行われました。例年はバタバタした感じで食事をとっていたので、皆と一緒に食事がとれたことは良かったと思います。

午後からの決勝戦の相手は周桑チームです。

ここまで来たからには皆優勝したい気持ちが強くなり、ミスを気にせず思いっきり戦おうという意気込みで挑みました。

序盤はお互い取ったら取り返す、緊張感のあるプレーが続きました。

中盤になると皆の目の色が変わり、より一層アグレッシブな思い切りのあるプレーができ、2点3点とリードする事ができそのまま逃げ切って勝利する事ができました。

5年ぶりの優勝という事もあり、試合後もかなり興奮していました。

来年は、連覇を成し遂げていないので目指したいと思います。

寺尾会長をはじめ、大会運営委員の皆様本当にお疲れさまでした。

今後もスポーツ大会を通じて、より一層信頼関係を築く事ができればと思っています。



# ソフトバレーボール大会報告 (ブービーチーム)

ブービーチーム 宇和島支部 亀岡 泰治

去る11月8日(土)西予市野村町「乙亥会館」にて、支部対抗ソフトバレーボール大会が行われましたので報告させていただきます。



宇和島支部

まずは大会の地が今年は南予なので、南予の青年部の皆様、特に西予支部の皆様、運営準備お疲れ様でした。スムーズな運営ありがとうございました。

大会には宇和島支部は「目指せ！1勝！！」をスローガンに、今年は支部長以下13名のメンバーで臨みました。…結果はくじ運により、1勝も出来ずにブービーになってしまいましたが…。しかし、宇和島支部は参加メンバーも増え、間違いなく支部の戦力は上がりました。(来年こそは一勝を…)

結果が前になってしまいましたが、ソフトバレーの参加が増える事が今回の宇和島支部の最大の戦果になったと思います。

メンバーが増えることが士会が活性化する事につながり、団結力も強まることと確信しております。



ソフトバレー終了後も、勝っても負けてもそれをネタに、おいしいお酒が飲めたことが良かったです。最後に、参加して頂いた皆様お疲れ様でした。来年も頑張りましょう。



## 〈結果報告 順位〉



準優勝 周桑支部



3位 西条支部



4位アンディ・5位松山B



6位 西予支部



7位 大洲支部



9位 新居浜・八幡浜チーム

# 建築士会の活動を振り返って

松山支部 和田 崇

みなさま明けましておめでとうございます。本年もよろしく願いいたします。

ある日、登録していない携帯番号からの着信があり、恐る恐る電話を受けたところ、声の主は住宅センター井上さん。「けんちくの輪」のご指名でした。

井上さんからの頼まれごとにはお断りするという選択肢はありませんので・笑、僣越ながら引受けさせていただくこととなりました。

自分自身の建築士会での活動を振り返ると月日の流れの早さを感じずにはいられません。

関西での学生生活、設計事務所勤めを経て、帰郷することになったのが平成16年の末のことでした。父に勧められるまま建築士会にも入会させていただきましたが、当初は活動に深く関わることもなく、時間の出来た時に顔を出す程度。ところが、前松山支部青年委員長・松本一師さんとの出会いがとても大きな転機となりました。松本さんの一見強引にも見える人集めや詰め込めるだけ詰め込んだ盛りだくさんの企画、これらを一步引いたところから眺めると、彼の気遣いや見えないところでの配慮(策略?)により、支部の青年女性委員会が一気に活性化したことを感じました。

現在松本さんの後任で支部の青年女性委員長をさせてもらっていますが、他の団体の方とお会いしたり、新聞社の取材を受けることもあります。以前は人前で話することが得意ではありませんでしたが、士会活動を通して機会を与えていただき、少しずつ慣れてきたようにも

思います。(人と話をする事、聞くことなどなど…コミュニケーション能力を高めることは設計の仕事においても非常に重要だと思う)

建築士会にはいろいろな職種の方が入会されており、年齢もさまざまです。以前は人生の先輩から一方的に教えていただく立場だったように思いますが、いつの間にか自分より若い方とお話することも増えて来ています。「建築」という仕事(または学問)はとても魅力的な世界で、老いも若きも一緒に語りあえる良さもあります。理由の一つとしては、昔からの経験や知識(デザイン・ディテールなど)の積み重ねの上に現在の技術がある、という点が挙げられると思います。自分も常に好奇心・探究心を持ち続け、若い人から刺激をもらい、先輩建築士のみなさんからはいろいろ勉強させてもらいたいと考えています。

職人さんを始め、建築界では人手不足若手不足が常態化しています。県内には大学の建築学科が無いため建築を志す若い人がいったん県外に出てしまうケースが多く、建築士会の会員数の増加が思うように進まないことや若い会員が少ないことにもつながっていると思います。青年委員会では「とびだせ建築士」という活動を通して地元の高校生と関わりを持っています。いつか彼らが自分たち建築士会会員との活動を思い出し、地元で建築の仕事をしたい、と思ってもらえると嬉しく思います。

今回のけんちくの輪ですが、仕事面はもちろん、支部の活動でもいつも助けてもらっている愛媛建築住宅センターさん西森さんにバトンを繋ぎます。よろしくお願い致します!



# 私の休日

西予支部 村上征士郎

大洲の武田さんよりバトンを受けました西予支部の村上です。現在、西予市役所建設課に勤務（18年目）しており、主に市の公共施設建築営繕業務に携わっています。

さて、「けんちくの輪」で何を書こうか、やはり建築に関することをマジメに書くのがいいのか……。しかしそれには原稿締切を過ぎた今1ページ書くのは自分には無理なので、私の休日の過ごし方について書いてみたいと思います。

とある土曜日の朝6時、朝寝したい気持ちと葛藤しながらもジャージに着替え宇和運動公園に6時半集合で職場のランナー仲間と朝ジョグ開始。市の行政職員としてどうあるべきかを熱く語りながら1キロを5分45秒ほどのペースで90分ほどトラックを走ります。

爽やかな汗と共に前日のアルコールを絞り出した後は自宅に戻りシャワーを浴びて朝食を摂ったあと、自転車整備の開始です。

我が家には3人の息子（中2、小6、小2）がおり、全員がマウンテンバイク（MTB）の競技に取り組んでいます。2か月に1度のペースで県内外でレースがあるので、練習や大会に向けての整備が欠かせません。子供の自転車3台と私の分を含めて4台の整備をショップにお願いしていたら村上家の財政は瞬く間に破綻してしまうので、整備はすべて自分でしています。

MTBは高校生の頃に乘っており、受験勉強そっちのけで阿蘇方面にサイクリングに行ったこともありましたが、大学時代からオートバイに乗るようになり、社会人になってからは二輪車安全運転大会という競技にどっぷりはまり、県代表選手として鈴鹿で開催される全国大会に4回出場させて頂きました。今は二輪車安全運転特別指導員として講習会等ボランティアで活動しています。

しかしオートバイは基本的に自分一人しか楽しめません。タンDEMしたとしても二人までです。『ちょっとバイク乗ってくる』と言って家を出る時の家族の冷たい視線……。あれには耐えられませんでした（笑）

この時には一級建築士の資格も取得しており、子供と一緒にできる何か楽しいことはないだろうかと考え、幸い自宅近くの八幡浜に練習コースもあったので長男と一緒にMTBを始めたのが6年ほど前です。

今では毎年8月に長野県白馬村である全国小中学生MTB大会が我が家の一大イベントとなってきました。

そんな子育てまっ只中ではありますが、合間をみて続けていることが楽器（サクソフォン）演奏です。

高校1年の時に、一つ年上の姉から『部員不足なので吹奏楽部に入らないか』と言われ、それまで全く音楽に興味もなく、ましてや楽譜なんてオタマジャクシが泳いでいるだけの紙にしか見えませんでした。『指使いもリコーダーと同じだから』と言いくるめられ、吹奏楽部に入部してバリトンサクソを始めたのがきっかけです。

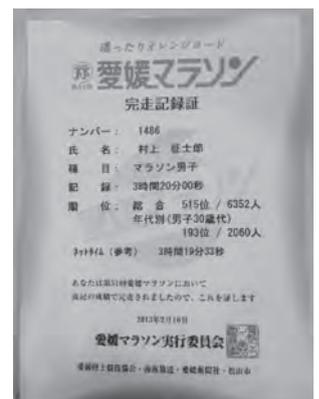
大学の吹奏楽部では授業は出席せずに夕方部活だけ行くという生活（あの頃もう少し真面目に勉強していれば違った人生が待っていただろうか……）

社会人になった一年目に県内の友人から『松山で新しい吹奏楽団を結成するから一緒にどう？』という話があり、この時に誕生した“愛媛交響吹奏楽団ウェーブ”で10年ほど仲間と共に活動をしました。

また、“愛媛サクソフォン協会”という団体にも所属しています。この団体はラージアンサンブルという形で、サクソフォンだけの30人ほどで様々なクラシック音楽を演奏します。ほとんどの団員が社会人で仕事も家庭も忙しいことから、8月の演奏会本番までに4日ほどしか合奏がないという、プレイヤーにとっては大変緊張感のある演奏会です（笑）。今年は東京からプロの演奏家の方をゲストに招き、同じステージで、しかもすぐ隣で素晴らしい演奏を聴けたことが今年一番の感動だったかもしれません。

そんな感じで私の休日はとても慌ただしく過ぎていきます。ほかにも地域行事やPTA活動、長男の部活の遠征配車などなど。まあ休日は家でんびりしたい派ではないので、しんどいと思ったことはありませんが（笑）

さて、これからは愛媛マラソンに向けて本格的に練習です。建築士会で出場される皆さん、くれぐれも過度の練習による怪我には気を付けて万全の状態ですスタートラインに立ち、自己ベスト目指して頑張りましょう！



## 2. 応急危険度判定活動に係る市町との連携について

○大西常務理事より、理事会資料により説明がなされた。

・平成 16 年 9 月 14 日、愛媛県と建築士会は、「愛媛県地震被災建築物応急危険度判定士の招集に関する協定」を交わしていること。

※ 判定士の招集要請：愛媛県から建築士会会長へ要請

・今回、同協定第 7 条の規定に基づき必要な事項を定めたこと

・その内容は、市町の長は、災害対策本部や避難所等の防災対策に必要な施設の判定を行う場合その他緊急を要する場合、判定士の招集について建築士会に協力を要請することができることとなったこと

※ 判定士の招集要請：市町の長から建築士会会長へ要請することができることとなった。

以上、理事会終了

■詳細については、本会事務局へお問い合わせください。

## 会員の動向

会員現在数（平成 26 年 9 月 30 日現在）

区分	本会	四国中央	新居浜	西条	周桑	今治	松山	伊予	大洲	八幡浜	西予	宇和島	合計
正	-	95	99	59	62	170	571	81	91	71	41	135	1,475
準	-	3	13	1	6	20	41	4	6	8	1	4	107
賛助	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
合計	6	98	112	60	68	190	612	85	97	79	42	139	1,588

## 入会者

正会員・準会員

支部名	氏名	級別
今治	青井 英成	1
松山	岡本 孝	1
松山	河合 聖次	2

支部名	氏名	級別
松山	小泉 貴央	
松山	佐々木栄治	1
松山	戸田 僚子	1

支部名	氏名	級別
松山	安永 論	2
松山	横山 宣宏	2
大洲	佐々木 健	

## 事務局よりお知らせ

### < 専攻建築士（新規・更新）登録のお知らせ >

受付期間（新規・窓口申請）平成 27 年 1 月 5 日～ 2 月 27 日

（更新・WEB 申請）平成 26 年 12 月 1 日～平成 27 年 2 月 28 日

（更新・窓口申請）平成 27 年 1 月 5 日～ 2 月 27 日

新規は窓口のみの申請となります。

更新は窓口と WEB の申請ができます。

専攻建築士申請要件等詳しくは（公社）日本建築士会連合会のホームページでご確認ください。

（<http://www.kenchikushikai.or.jp/senko-new/summary.html>）

## お知らせ

お知らせ

## 平成 26 年秋の黄綬褒章に本田壽さん受賞

平成 26 年 11 月 3 日、叙勲。おめでとうございます。

## 平成 26 年度 連合会会長表彰 受賞

佐伯 明（今治支部）・田中 羊子（松山支部）

## 平成 26 年度 伝統的技能者表彰 受賞

山本 文義（宇和島市）

## 「人・建築家・松村正恒を見て来た人」と題して受けたインタビューについて。

松山支部 二宮 初子

今迄にも、私は何度かインタビューを受けたことはありましたが、これは、今回（2014.7月号）の玉乃井委員長のインタビュー記事を読ませて頂いての感想です。

この「人・建築家・松村正恒を見て来た人」の記事については、四時間にも亘るとめどない話をとおして、よくここまで纏めて頂いたと感じ入ると共に、不肖の弟子として何処まで師について語ることができたのか？と反省の昨今でもあります。

そして、『一人前の建築家として育て上げられなかった』ことを悔いておられた師の心情に想いをいたし、生涯学習の徒でありたいと思う今日この頃です。

『形ある物は、いずれ失せるもの』と、よく言っておられた師の言葉のウラにあったものは、「失ってはならない」のはモノではなく、「豊かな人間性に支えられた精神だ」、という生き方への指針ではなかったのか？と。



## 版画

山田 きよ

【表紙の版画について】

ご紹介せずとも超有名な観光建造物、「内子座」と「大洲城」である。被写体を切り取る！私がよく使う表現方法なのだが、今回は短冊形。これには訳がある。展示会でのごこと、「部屋に飾れるサイズがないねえ…。」どうやら各々私の作品に対して大きいの、小さいの、おっしゃるのだ。そこで思いついたのが、三寸五分の柱にでも飾れる「短冊形」なのである。さて、ご用命の程は…。

表紙作者 山田 きよ プロフィール

- 1959 喜多郡五十崎町（現内子町）に生まれる
- 1980 松山デザイン専門学校卒業
- 1982 広告デザイン会社を退社し、家業の竹材業に就く
- 1988 独学で切りぬき手法のシルクスクリン版画を初制作  
以後、内子町内子座や大鳳合戦のポスターを手がける
- 1993 初の個展
- 2003 愛媛県文化協会奨励賞
- 2012 個展回数が100回となる

(本名 山田 清昭 内子町在住)

## あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、広く異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしていきます。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承下さい。)

「いしづち」の本年度の原稿締切日

平成27年 3月号(103号) 1月22日(休)  
5月号(104号) 3月26日(休)

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり5枚程度まで題名を付けて添付ください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付ください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかも知れませんので、予めご了承下さい。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がれば、と願っています。  
情報・広報委員会

## 読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せ下さい。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内)宛  
— FAX 948-0061 —

## 編集後記

新年早々唐突で、しかもこれは私の勝手な見方になりますが、言葉には三つの言葉があるのではないかと思います。それは、心の中で思う「ことば」と、口から出る「コトバ」、そして文字となった「言葉」です。「コトバ」にしても「言葉」にしても、その“源流”には「ことば」があり、そこから流れてきています。

この見方からすれば文字となった文章は、人の「思いがかたち」になったものである、と言えます。

この、「思い」から「かたち」への流れは、ひとり文章にとどまらず、建築も含めたすべての表現に当てはまるものではないかと思います。つまりは、人の数だけ「思い」があり、思いの数だけ「かたち」がある、ということです。

今回からまた、そのひとつの「思い」が加わります。表紙の版画でおなじみの山田清昭氏による連載、「竹のはなし」です。

様々な分野からの、それぞれの「思い」が「いしづち」という一つの「かたち」をつくる。ちょうど多くの人々が携わって一つの建築をつくり出していくように、この「いしづち」が、そんな面白い“縁の現場”になればと願っています。  
(玉乃井 公和)

## 〈いしづち〉2015 / 1

平成27年1月発行

発行人 **会長 寺尾 保仁**

発行所 **公益社団法人 愛媛県建築士会**

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5

TEL (089)945-6100 FAX (089)948-0061

http://www.ehime-shikai.com E-mail: info@ehime-shikai.com

印刷所 明星印刷工業株式会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長 玉乃井公和 副委員長 大上 恵子

編集委員 二宮 初子 宮内 理 越智 麻衣 石丸真智子 小笠原 元 水野日出夫